



Studio ***46

目次

【暁夜曲】 Before aDaylight	
OPENING	2
❖1：姉の婚約者	4
❖2：空を映す眼	8
❖3：駆け落ち	12
❖4：黄昏の娘	17
❖5：黒い天使	21
ENDING	26
-INFOMATION-	29
【黄昏紅花】 ※協奏-excerpt-	30
【黄昏千夜】 Over theSkylight	
プロローグ	32
❖開幕	34
❖①❖夢から醒めて	36
❖②❖告白	41
❖③❖赤い地平	51
❖終幕	56
エピローグ	58
-LINK-	60
❖競奏 curtain-up	61

【曉夜曲】Before aDaylight

OPENING

竜の珠を持つような竜人——自然の脅威に生まれて体が弱いなど、姉以外信じなかつた。母も竜人なのに非常に早く亡くなり、それは当時猛威を振った干ばつのせいだと思われていたが、母と同じ「空の光」を持った彼女は、母がいつも笑顔だった理由を知っていた。

それは、母が死ぬ少し前のこと。姉妹とは思えないほどいつも大人しい姉が、十三歳に見えないしっかりした顔で、それでもそっと、五歳の妹が臥せる板間の戸を叩いていた。
「アルン……入っていい？」

断る理由などない。お姉ちゃん、と喜ぶ。
「アルン。お母様が、もう危ないの……」
「うん。きっと、次の満月はみられないね」

無邪気でわかっていないような笑顔をする彼女に、姉は痛ましい目をする。長兄が幼い頃から引き離されて育ったので、姉は自分がしっかりしなければ、と始終気を張っている。

母のことも、母のように微笑む妹のことも、姉は心配していた。そんな姉こそ苦労しがちで、その日は姉の黒髪が白くなつてみえた。
「……アルン……あなたを助ける方法があると、教えてくれたものがあつて」
「……え？」

そして姉は、自身の翼を分けてまで彼女に命をくれた。
それがたとえ、反則であつても。



❖ 1：姉の婚約者

お姉ちゃん以上に好きなものはない。そう思いつつ、故郷の竜宮の地が彼女の体質には合わず、違う大陸に住まねばならなかった。

極光の見えやすい地である、寒冷な山村。「空の光」の中でも極光という、珍しい気象が最も力の源になる竜の彼女は、やっと人間並みにここでは生きられるようになった。

彼女に手紙を送り、様子も見に来る厳格な伯母の言葉に、つい素っ頓狂な声が出てきた。

「え？ ソーマ姉様はまた、新しい旦那様をもらうの？」

床の無い箪の家で、伯母も溜め息をついた。

「まさか天上人の血がここまで強いとは……ソーマはもう、五人の子を産んだというのに、誰も『^{きょくやうず}極夜渦』に適合しないのです」

「うっわー……まあ、あたし達三人の中でも、ソーマ姉様しかてんでダメだったしなあ」

奔放に話す彼女のことを、伯母はよくない顔をしつつも止めない。責任感の強過ぎる姉がいるので、甥と姪を厳しく教育し過ぎた、と手心を加えてくれているのだ。

「アルンはどうなのですか？ 『^{とうかすい}桃花水』は、『極夜渦』ほどの強い水気を持ちませんが、それでも貴重な新生の竜珠ですよ」

「あははは。本当、何であたしみたくヒヨワな竜に、こんなのついてきたんだろうね」

彼女が一番母に似ている、と伯母は言う。母は、水と風の極みである「極夜渦」を継ぐには、どちらの気も乏し過ぎた。水より氷、風より光、そんな性質でも「極夜渦」に適合できてしまったことが不幸だろう。

「でもねー伯母様。この薄暗い山村で、いい出会いなんてあると思う？」

「そうですか。それでは今は元気そうなので、また竜宮でお見合いをしましょう」

「ぎゃつ。やぶへび……」

そう言いつつも、体力の無い彼女に伯母が付き添ってくれることは助かる。一番は姉に会いに行きたい。なのでこうなることは半ばわかって、出会いの話をした彼女だった。

身なりをほとんど構わない彼女は、腰元をきちんと締める貫頭衣の伯母と違って、まことにかく暖かければいい。^{あか}紅い襟巻、腰巻、肩掛けを白い上下服に巻きつけている。足は獣の毛皮を巻いた深靴を村でよく貰う。

川の流れに働きかけられる彼女は、普段は働かなくても、治水の主として重宝された。急な傾斜の山村で山上湖からの川が荒れると洒落にならない。体が弱いという話も人間はすぐ信じてくれ、よく差し入れもしてくれた。

「しかし山には、本当に若い男がいませんね」

「そーなの。山賊は大体やっつけちゃったし」

見た目によらず、戦えば強い彼女に、手を出す人間もいなかった。平和とはいいいものだ。

髪を切るのが上手い人間が去年亡くなってしまったので、まっすぐにのばしっぱなしの父似の茶髪を草紐でまとめた。何度も乗った船旅の間くらいはもつ。

久しぶりの竜宮で、いつも痩せている姉に良い肉を食べさせたかったので、生きた猪を運んでくれた伯母はさすがに嫌そうだった。

「だって竜宮、魚ばかりだし」

彼女は自身の「力」で冷たくさせた山鳥を、何羽か棒に括って持った。竜人には普通そういう栄養はいらないものの、とにかく姉のことは心配なのだ。子供を産む度に痩せ細っていき、それでもまだ後継に恵まれないとは。せめて美味しいものでも食べてほしかった。

さあ、帰ったら肉をさばくぞ。意気込んで故郷の土を踏んで、あまり獣の肉を食べない普通の竜人達にはとても引かれる。人間とは楽しく鍋を囲めるのに、嘆かわしいものだ。

姉も最初は恐る恐るだった。美味しいの！ と妹が言うのを信じて口にしてくれ、今では帰る度に妹の手料理を食べてくれる。彼女のお勧めは卵なのだが、さすがに運べないこと、竜宮でも養鶏はあるときいて探すことにした。

「姉様ー！ 会いたかったー！」

妹が帰るときいて、そわそわと港まで来ていた黒髪の姉に抱きついた。相変わらず外見は大人しく控え目な姉が、もう三人もの旦那と別れて来たとは、にわかに信じ難かった。

子供は大体、天上人にとられてしまった。「力」がほぼ天上人寄りだったからだ。姉は子供達に一番手がかかる赤子の時だけ育てて、今は年に数回会えるくらい、と嘆いた。

竜宮での彼女達の家も、山の中腹にある。砦として石垣の奥にある茅葺の家で、暖炉を囲んで姉がしおしおとお茶を入れてくれた。

「でも、アルンが元気ならいいの」

「姉様……もう、横暴な天め……」

元々、彼女達の父が天上人でも強い家系だ。竜人と天上人は共に、自然界の「力」を司る。本来はあまり相容れない化生同士だが、父と母は出会ってしまった。それは仕方ない。

「姉様。もうちょっとガツンと、旦那に何か言ってやったって良かったんだよ？」

「でも、元々無理を言ったのは私だから……私なんかの夫になってくれただけで……」

天上人と竜人の混血。相容れない血だから母は早くに死んだとか、どちらの系統としても中途半端だとか、姉は讒言に苦労している。

「そうだよね、竜人相手でも天上人旦那でも見下してくるもんね。ほんとに腹が立った、今までの旦那の奴ら……」

姉はそれでも、子供さえ作れれば良い、と割り切って夫を迎えてきた。その結果がこれではあまりに報われない。今度の旦那候補はさすがに何とかしたい、と彼女は思った。

「ねえ、四人目の候補はいつ来るの？　姉様に無礼を働くかのよう、今度は私も会わせて」

「え？　そんな、アルン……」

「こういうのは最初が肝心なんだよ。姉様に舐めた態度をとらないように、うるさい小姑がいるぞ、って先に思い知らせてやる」

　　そうかな、と、姉は嬉しそうにしてくれた。何でも、次の候補は元々知人らしく、確かによくからかわれて困っていたと言う。

「三人共すぐ離縁していった、って話したら大笑いされて……じゃあオレにしどく？」

　　と言うから、そうなったらしいけど、と流したはずが、何でか本当に婚約者になって」

　　旅する魔導師。竜宮に来る時は顔を出す男。姉は色んな竜人達にもバカにされているが、竜宮では最も大きな「力」を持つ者の一人だ。だから竜宮に滞在する異邦者は、わりとすぐ許可を出す姉に挨拶に来ることが多い。

　　姉が簡単に許可をするのは、異邦者がもし暴れたら容易く鎮圧できるからだ。おどおどとした見た目に騙される者は愚かでしかない。姉が怒れば彼女も震え上がるほど強い。

「姉様の苦労、笑うなんてサイテー。そんな冷やかし、こっちからお断りだわ」

「あ、あのね、アルン……」

　　それでも悪いヒトでは、と口にする姉は、どうやら多少相手に興味を持っている。尚更また苦労しそうだ、と彼女の頭が痛くなる。

　　姉に対する、男共の仕打ちを見て來たので、彼女は基本的に男が嫌いだった。父は天上で普段は過ごさないといけず、母が亡くなつてからは落ち込みが続いてほとんど来ていない。竜宮の竜人は、若くして「極夜渦」を継いだ姉を混血と見下し、優しい姉が「力」を滅多に見せないために舐め切っている。竜人以外は尚更、姉の「力」も苦労も知らない。

　　姉が控え目に生きているのは、むしろ他の竜より圧倒的で、かつ多彩な「力」を持ったからだ。水も風も、そして鬼火という虚ろの熱まで姉は使いこなす。強い火の兄は南方の統治に加わっているが、火そのものではない姉の鬼火は、ある意味兄より強い。

「兄様の火だって、吸収して使えるんだぞ。姉様をバカにした奴、みんな燃やしちゃえば良かったのに」

　　姉が竜宮の來訪者を迎える時の、海に近い石の庭園で彼女は待つた。これまでの夫達は、姉が優しいから生かされてきたが、四人目の旦那候補には甘い目は見させない。

　　そう意気込んで、石の柱にもたれて立っていた。少し先の丘の下には海が見えて、風は暗い山村より温かく、空には白い雲がかかる。

「——失礼。極夜の長に、お目通り願いたい」

　　そこで彼女は、見たことの無い赤い気配に出会ってしまった。庭園に入ってきたのは、姉の話とは違う赤い髪で黒衣の男だった。

　　珍しい化生もいる、と。白い髪の魔導師を待っていたはずが、赤い髪の悪魔が来たので、彼女は旦那候補が遅れているのだと思った。

「？ 貴男は、旅の悪魔とでも？」

「——」

「あの、竜宮は天上人の監視が多少緩いけど、それでも悪魔はちょっと困ります」

男は黒い外套の頭巾の中、ぽかんと驚いている。そこで彼女も、はっと頭が回る。

「……俺が悪魔と判るのは、おそらく、貴女くらいではないかと」

「——……」

やっっちゃった、と男に背を向けた。悪魔は確かに普通にいるが、偽装しない者は少ない。

彼女は昔から、ヒトの心の機微であったり、魔術的なまやかしだったりによく目が効いた。実の母も同じように目敏く、母に至っては、世界中にどんな「力」がどうあるかを、遠くまでよく探ることができた。水の竜人なのに母の気配には淡い光が絶えず、世界中の光を集めて遠くを覗いているようだった。

いきなり正体を見抜いてしまった相手に、彼女は気まずくなりながら、ひとまず愛想を浮かべて改めて振り返った。

「まさか……貴男が、ソーマ姉様の四番目の旦那様？」

よりによって、悪魔が今度の旦那の候補。世界中で忌避される化生に、内心頭を抱えた。

❖ 2：空を映す眼

バカにしているにも程がある。その時にはまずそう思った。後継ぎがほしい姉の弱味に付け込み、悪魔の傀儡にされかけていると。

悪魔は彼女を見て、柔らかく笑いかけた。騙されるな、悪魔は基本優しいもの、と彼女も愛想笑いを崩さない。しかし悪魔が次に口にしたのは、予想外の話題だった。

「やはり、極夜の姫君の妹なのか。その翼は近縁以外で、そう在るものではない」

「……え？」

今度は彼女が硬直する番だった。竜宮では異端と言われるだけなので、隠している翼。そのことをこの悪魔は言った。姉が妹の命を救うために、分けてくれた大事な光。

「えっ……どうして……」

「これでおあいこだろう。貴女も何か、並でない目を持っているようだから」

それは男も、悪魔以上の何かであるはずの話。意外に害の無さそうな顔で優しく笑っているが、姉には横柄な態度だったのを聴いた。これは猫を被っているはずだ。

とりあえず非常に怪しい相手なので、姉に近付けたくない。どうすれば良いかを考える時間はなく、苦し紛れに彼女は海の方を見た。

「……あら、素敵なお夕日ですね」

話を逸らす。そして誤魔化し、飛躍させる。

「貴男、母様みたいに大空を映す眼ですね。名のある悪魔様でしょうか？」

「さあな。特技は稀だが、階級は低そうだ」

一緒に夕焼けを見て、坦々と答えた。多分何か、眼に異端を持った悪魔。彼女が敵う者だろうか。魔力の気配は多くも少なくもない。

体力は無いが、彼女も「力」は強い。空の多い広場か川辺におびき出せば、大概の化生には勝てる。もしも災いの芽ならここで摘む。

「貴男に見えるこの翼では、空を飛ぶことは叶わなくて。もし、貴男には可能なら、私をあの光の中へ連れていってくれませんか？」

唐突な彼女の言に、悪魔が面食らっていた。それはそうだ。初対面で何を言い出すのか。

人間が支配していた古い時代とは違って、世界はとても野蛮だった。強い者が弱い者を蹂躪するのは当たり前で、姉のように強さを誇示しない者は強くてすら舐められる。

彼女の翼を視抜いた者が、姉の強さに全く気付いていないとは考え難い。強大な竜人が悪魔にたらし込まれた、そんな風評だけでも害が大きく、実際にこの悪魔が苦労人の姉を懷柔してしまわないと限らない。

彼女の青い目の奥にある火に、その時悪魔は気付いていたのかどうか。

「……お望みのままに。本当ならば、貴女の魂を代償に、と言いたいところだが」

そして次の瞬間、丘の上に蒼い影が舞った。

彼女は絶句した。すぐ近い空に現れたのは、よりもよって飛竜という類の最強の獣。

「どうぞ、背中に」

「……え、ええ」

空の光の中に連れていって。適当に無茶な要求をしたのは彼女だ。笑顔は何とか保ったまま、庭園の広場に降りた飛竜の背に横向きに乗る。

どうしてこんなことに。彼女が落ちないように後ろで支えに乗った悪魔は、本当に海を焼く夕陽の中に彼女を連れていった。

「……キレイ……」

こんな海上で悪魔と殺し合いを始めれば、彼女も海に散ってしまう。しかしそれ以上に、初めて乗った飛竜で往く空に呆気にとられた。

彼女の「力」は、夜空に紅い光の竜を喚ぶ。本質はその紅の光を作る強大な太陽の風で、空に流れる薄い大気を雪解けさせるものだ。地上で使えば相手を四散させるほどに大きな「力」で、負担も大きいのでほとんど出したことはない。元は河川の水の竜なので、川があれば大抵の攻勢も防御もできる。

けれど空にはいつも憧れていた。天上人の父は様々なしがらみに縛られ、天の翼は父のためにしかなく、彼女達が地上を離れたことはない。父の血で天の翼を持った姉は、幼い彼女に片翼を分けたために、姉もその翼では飛ぶことができなくなった。分けられた翼は銀の光になって、今も彼女達の背にある。

寒い季節が近かったので、夕焼けはあっという間に終わってしまった。言葉を失くして飛竜の背中から空を見つめたままの彼女に、悪魔が後ろから声をかけた。

「お気に召したようで何よりだ。しかし……」

空は、思った以上に寒かった。冷え切った体で彼女はやっと、自分に体力がないことを思い出した。同時に意識がぶつんと落ちた。

「——」

悪魔が驚いて声をかけてきたのは聴こえた。まさか悪魔も、仮にも竜人が、体を冷やしただけで気絶するとは思いもしなかっただろう。

正確には「空」という場が、彼女には刺激が強かった。無意識に「力」を放つくらいに。

極夜の竜がいる砦は、異邦者には隠されている。謁見は大体山の麓で行われる。

そのため悪魔は、彼女を何処に運べばいいか判らなかったのだ。最初の庭園は今日だけの約束の場で、そこから砦に案内されるはずだった。彼女の他にそれをする役はおらず、街でも誰が敵かも判らないので、困った悪魔は海辺の岩場で火を炊くしかなかった。「温めたら大丈夫なのか、これは……？」

岩場の間で、焚火の近くに彼女を寝かせて外套をかけた。先の飛竜は氷の系で、冷気を起こすので余所にやっていた。じわりと汗が彼女の額に浮かび、体が震えてしまう。

完全に夜になると、竜宮の空に顕れた光を、悪魔が見上げた姿が見えた。起き上がれない彼女だが意識はうっすらと戻り、青く光った冷たい雲の上に、自らの紅い竜が顕れたのがおぼろげにわかった。

——姉様、きっと、心配してる……。

弱った者の気配は、野蛮な世界では格好の餌食だ。悪魔は彼女と悪魔を隠す結界を岩場に張った。その中で寝込んで帰らない彼女を、姉が見つけることは難しいだろう。妹の使う珍しい竜が夜空に顕れていても。

「……美しい竜だ。あれは、貴女の『力』か」

横たわる彼女の汗を拭い、悪魔がそっと、彼女の額に手を当てた。高い熱が出ていた。
「やはり……『空の光』は、ヒトの身に余る」

どうしてなのか、悪魔の声が悲しげだった。そして、「空の光」。彼女が母と同じその光を受け継いだと、かつて彼女に姉の翼を分けた何かが教えてくれた秘密の言葉。

あの光が母を、空に連れて行ってしまった。父は母に近い天から帰ってこない。姉は長の重責を引き受け、好きでもない相手の子供を五人も生んだ。そして大事なその子達すら、ほとんど引き離されている。

「連れて……いって……——」

胡乱な意識が苦い記憶に満たされ、思わず呟いていた。悪魔がはっと、彼女を見ていた。開けられない目に涙が溜まる。ただ悔しくて。

こんな所で倒れている場合ではない。姉の力になりたかったのに、自分はいつも無力だ。

焦っても体は動かない中、ふっと、悪魔が彼女の頭を撫でた。さらりと髪に滑らせる手。ゆっくりと行き来する小さな温かさが、いつまで続くのだろうと思うほど繰り返された。手が離される前に結局、彼女は眠りに落ちた。

そして目が覚めた時には、座り続けている悪魔が、薪を追加しながらバツが悪そうに、彼女に声をかけた。

「……すまない。貴女の容体が落ち着くのを待っていたら、朝になってしまった」

「……？」

どうして申し訳なさそうに言うのだろう。

辺りは確かに、うっすら明るくなっていた。彼女の熱が下がったことを、手を当てて確認した後に悪魔が静かに立ち上がった。

「貴女の姉君が心配しているだろう。探して詫びて、ここまで連れてくる」

火にだけ気を付けるよう、彼女に言った。横向きに丸まり、ぼけっとした頭で頷くと、悪魔は助けを探しに結界を出でいった。

「詫びる……？　なんで……？」

謝らなければいけないのは彼女だ。姉にも、そして面倒をかけた悪魔にも。

だからまさか、悪魔が視つけて迎えに来てくれた姉が、彼女に言うとは思わなかった。あの悪魔を伴侶にする気はないか、と。

「え……ソーマ……姉様……？」

山の砦の住屋で休むと、体調も大分戻ってきた。昨日は初めての空で、はしゃぎ過ぎてしまった。その程度のことだと彼女は思っていたのに、寝台の横で座る姉は迷い悩む表情で続けた。

「あの方、私に、きちんと謝って下さったの。妹さんと一夜を過ごした。責任は取る、と」「えっ。ま、待って姉様、倒れてたのに私、何もなかったよ！？ 何でそんなこと言ったの、あの悪魔は！？」

「うん、アルン、私は信じているわ……でも伯母様は、婚姻前の娘に何てことを、って」
はっ。厳格な伯母の困った顔が思い浮かぶ。

「私もまさか、あの方が悪魔とは知らなくて。妹さんに気付かれたから、もう隠せないって、長姫の立場上まずければ婚約の話はなかったことにしようって。それは、正しいと思うの」

つまりは彼女が、心配した通り。さすがに悪魔なんて相手を、長の夫にするのはまずい。しかし話は姉の婚約の件に留まらず、相手が悪魔とは知らない伯母が、それなら彼女と、姉の見合い相手を交換すると言い出したのだ。

「伯母様の理屈はともかくとしてね。あの方、私の一番の悩みを解って下さったの」

「……え？」

こちらは姉が、伯母の提案に乗ろうとしている理由だ。彼女は知らず、体が竦んだ。

いったい何が起きているのだろう。姉の顔は真剣そのもので、姉と番うわけにいかないはずの悪魔を、妹に勧めている。

「アルン。……このままだと、あなたはもう、長くないでしょう」

「……——」

「あの方はそれに気付いていたわ。あなたを助けたい、そう言って下さったから」

それは確かに、目の前で倒れもされたら、心配になるのはわかる。しかし姉は、とてもまっすぐに——そして辛そうな顔をしている。

「お母様のことも、誰も助けられなかった。あなたも危ないと、私がいくら言っても真剣に受け取る者はいない。ここはそういう所」

ふっと。母が姉に伝えた、重い言葉を思い出した。天上人を愛した母は、「竜にはヒトの心がわからない」、そう諭していったのだ。

「でも、姉様……姉様は……」

そんな心。周囲の竜人に解ってもらえない心配を、悪魔は解ってくれた。そう言う姉の目には、今までにない情が浮かんでいる。

「あの方以外に、あなたを預けられるヒトはすぐには現れない。間に合わないのは嫌なの」

かすかに潤んだ青い目を振り切って、姉がきっぱりと言った。たとえ相手が悪魔でも、そして、おそらく姉の心を惹いた相手でも。

彼女は何も言えなかった。ただ、次から次へと涙が流れて、止まってくれなかった。

❖ 3：駆け落ち

体が回復して初めにやったことは、彼女に見合いを申し込んでいたという、風の竜人の一人をふることだった。

「あら、貴方、空の一つすら飛べませんの？ がっかりだわ、この天の翼のあるわたくしに婚姻を申し込みたいなら、出直してらして？」

「——」

世にも淡麗な水竜と噂される彼女の見た目で、見合いの希望者は結構にあったらしい。手酷くふった内の数人が、姉と会って優しい姉の良さを知ればいい。姉は優し過ぎる、とくさくさした意識のまま男達を沢山ふった。

悪魔はあれから、一度だけ白い髪の魔導師の姿で会いに来た。その時には本当に心から青白い星影の魔導師になったそうで、赤い髪の悪魔の姿は彼女にも見えなかった。

「ってわけで、ソーマとの話はご破談だから。あんたを娶る準備をしてから迎えに来たい、とアステルが言ってる」

「……えっと。あたしの意志は？」

「オレに言うなよ。ソーマにはウィの返事をしたんだろう？」

「……じゃあ、アナタの意思是？」

うぐ、と黙る魔導師に彼女は少し癒された。あ、こっちは姉様が好きだったんだ。魔導師には悪い話ではあるが、それが嬉しかった。

先の長くない彼女を助けたい。何と醉狂な悪魔だろうか。会ったばかりなのに理解には苦しむが、姉が信頼した悪魔であることや、魔導師の方は姉の価値を知っていてくれる、その条件は確かに得難い。

「アナタも災難だね。ソーマ姉様の方が絶対優しくて、長生きで幸せになれそうなのに」

「オレもそう思うんだけどなあ……この体は基本アステルのものだし、お互いの心が解るわけじゃねーから、決まった事を受け入れるしかオレはないんだよな」

正直だね、と思わず笑った。姉のことを、手放して良いと思っているのは彼女と同じで、ここで気が合ったことで彼女は安心ができた。

「アステルさんは、あたしの何がいいの？」

「オレ達はずっと、『空の光』の主を探して。何でなのかは憶えてないくらい、遙か昔から」

それはまた、全くよくわからない理由だ。悪魔というのはそういうものなのだろうか。

これまで「空の光」を受けた者は、大体が短命だったと言った。悪魔が視つけた頃にはもう瀕死だったり、誰かの伴侶だったりと、彼女が悪魔には初めての恋、とあからさまに胡散臭いことを説明される。

「オレは何回か色んな奴と付き合ったけど。アステルはもてるけど、本気になったことはないから、どうなるのかは正直わかんねー」

いい加減だ。彼女も真剣に悩まないで済む。

「ソーマのこともかなり気に入ってたけどな。でなきゃ寿命の結構ある竜人との婚姻なんて、アイツも了承しねーし」

体の主導者が悪魔なので、魔導師が悪魔の気に食わないことをしようとした場合は軌道修正される。互いが何を五感で感じ、話して行動しているかはわかる、という形の共生者。

「そっか。どんな意味かはわからないけど、姉様の価値がわかるヒトなら、まあいいや」「悪魔の純情に、まあいいやとか言うなよ。とりあえず、あんたの延命に使えそうな光をとりに帰るから、オレ達が戻るまで死ぬなよ」

心配し過ぎ、と笑って見送った。急ぐ姿は本気で、姉ともろくに話していかなかった。

複雑だった。姉の良さをわかってくれる男なら、悪魔だろうと姉の夫で良いのでないか。彼女が突然二人の間に割り込み、一夜の事情で姉の好きなヒトを奪っていった。

「はあ……しにたい」

他ならぬ姉が泣くので、自分では死ねない。これからとても健康になり、かつ悪妻になり、悪魔に愛想を尽かされ離縁されるくらいしか、今のところは打開策が思い付かない。

自分の不始末に落ち込んだ時は、竜宮では必ず行く所が彼女にはあった。

極夜の砦でも最奥にある保養の社。^{やしろ} 彼女も体調を大きく崩した時にはよく世話になった。

この社が作られる理由になった、社の外に出ることも叶わない黒髪の甥が、入ってきた彼女に気付いて寝台から歎声を出した。

「アルンねえさま！　帰ってたの？」

「おばさんでいいよー。生きてた、アカ？」

姉の下に唯一残った子供。最初の竜人の夫との第二子だが、「極夜渦」を継ぐどころか、竜の目も逆鱗も、天の翼も持たずに生まれてきた。本当に自分の子なのかと夫は姉を疑い、第一子を連れて郷里に帰ったのだ。

「ねえアカ、どうしよう。あたし、結婚することになっちゃったの」

「え？　ねえさま、おめでとう！」

まだ八歳の甥は無邪気に喜ぶ。彼女も笑う。寝台の横の椅子にもたれて座り、甥のために山鳥の羽で作ったお土産のお守りを手渡した。

「おめでたくないんだよう。姉様の旦那様になるはずのヒトだったの。あたし、姉様にはいつも迷惑かけてばっかり」

「え？　じゃあ、ぼくの新しいお父さま？」

「そうそう。でも、そうでなくなっちゃった。ごめんね、アカ。優しそうなヒトだったのに」

八歳でも甥は話がわかる方だ。何でそんなことを？」と、満面の笑顔で返してくれた。「お母さまがやっと、ねえさまにふさわしい相手を見つけてくれたんだ。ねえ、ねえさま、幸せになって。お母さまはいつも、ねえさまが一人ぼっちだって心配してるんだよ」

実の父親に、捨てられたも同然の甥。人間ほどにも体力がなく、この甥を見ていると、彼女の体の弱さなど大したことがないと思う。歩くことも走ることも、山を登ることも彼女はできる。竜人として「力」を使うと、後の反動が酷いだけで。

甥はもう長くはないだろう。姉はそれこそ、例の魔導師にも相談するなど、手を尽くして我が子を助けようとしてきた。彼女は一度、彼女の翼を姉に返して、甥に与えてみるのはどうか、と言った。姉は姉自身に残った翼を与えられないか、既に相談していたようで、彼女と違って、甥にはその翼が合わないので、助けにならない現実を知らされていた。

彼女や母は、「空の光」だから短命なのか。甥は違って、心身共にとにかく「力」が無い。姉の子供でなければ、生まれてくることすら難しかったと彼女は漠然と感じていた。

住屋に戻って、ごろんと寝台に横になった。茅の屋根を見上げながら、また涙が出てきた。

「姉様は……姉様こそ、一人ぼっちなのに」

竜にはヒトの心がわからない。長女だから、「極夜渦」に適合したから、当たり前として姉は長の重責を引き受けた。皆を守る「力」があるから、できることをしないのは、あの姉には有り得なかった。妹に命の翼を分け、恋した人を譲り、自分より妹や子供の心配をしている。あまりに合理的な心で。

姉のために持つて帰つて来た鳥獣の肉を、姉と甥に少しづつ振舞つてはいるが、あっさり日々は過ぎていった。

悪魔がまた竜宮に現れてきた。姉の厚意で、伴侶となる彼女の山房に当面滞在して良いと、異例の待遇まで与えられて。

「姉様……本気過ぎる……」

他の者に、悪魔の正体を勘付かれないためでもあるだろう。極夜の砦にはヒトが少なく、姉も麓に下りていることが多い。

やってきた悪魔は、雪囲いの間から彼女の住屋に入り、土間を上がってすぐに跪いた。赤い髪と黒い外套の貴公子。そんな風体で。

「紅い夜空の光の、『暁』の君。貴女の時間を俺に分けてほしい。貴女と共に生きることができれば、地を這う悪魔にも光が与えられる」

傲慢な男性を嫌う彼女の感覚では、およそ誠実で情熱に満ちた求婚だった。相手が姉の、元婚約者でなければ。

「……貴男は、私のような欠陥の竜が伴侶で、本当に良いのですか」

「欠陥の竜、とは？」

冷たい目色で伝えたからか、真面目な顔で聞き返された。答える必要は感じられない。先行き短い女を助けたいなどという理由が、彼女でなければいけない「愛」とは思い難い。

黙る彼女に、悪魔は哀しげな顔で笑った。

「貴女こそ、姉君から押し付けられた悪魔が伴侶で、本当に良いのか」

「……そんな」

「貴女達の絆はたいそう強固だ。貴女自身は生きたいと思っていないのに、貴女は姉君のために生きようとして、姉君はそんな貴女を失いたくない」

悪魔という者が、こうして人心にするりと入り込むと、彼女は知識でしか知らなかつた。呆然としていた彼女に、悪魔は彩のない眼をしかめて苦く笑った。

「『空の光』の受け皿に、短命者が多いことは、それぞれの理由がある」

立ち上がった悪魔が、彼女に一步踏み出す。

彼女は何も言えないまま、悪魔を見つめる。

「『空の光』がもたらす預言の力は、受け皿の心に、ヒトとは違う負荷を与える。力自体が命を削るのではなく、負荷の表れ方も違う」

「……——」

「貴女が笑っていなくてほっとした。貴女の目にあるのは、俺には敵意に見える。貴女の姉君と同じように」

それは別の意味で、衝撃的な言葉だった。敵意。自分はともかく、あの優しい姉が。

「貴女も姉君も、互い以外を信じていない。この世に助けなどない、そう知るかのように」

固まる足が、今にも崩れ落ちそうだった。この悪魔は本当に、何者なのだろうか。

泣くな、と彼女は歯を食い縛った。悪魔が彼女以上に姉を理解しているのが悔しかった。

姉の献身が優しさではなく、世界への敵意から出るものだとしたら。それなら姉こそ、母とそっくりだろう。母がいつも笑っていたのは、母の視ているものを理解する者はなく、期待すらしていなかったからだ。

だから彼女は今、悪魔に微笑めない。

「そんなことを仰って……どうなるのです」

彼女に易々と踏み込んできた悪魔。こうもまっすぐ、彼女は心を暴かれたことがない。

悪魔はそこで、今度は照れくさげに笑った。

「すまない。本気で愛するヒトを口説くのは初めてで、加減がわからなくて」

それは酷く想定外な、素朴な反応。

彼女はうっかり瓦解した。思わず全身で笑っていた。

「く、口説くって……初めてって……」

背を折って泣き笑う彼女に、悪魔がまたも面食らっていた。結局笑いながらぐずぐずと泣いてしまい、何かできることはあるだろうか、と正面から肩を支えられるまでに至った。

「……旦那様。……私と駆け落ちして下さい」

は？ と、さすがの悪魔も眼を丸くする。

「私は、姉様のそばに居たい。でも……この幸せを、姉様に見せつけられない」

にへら、と彼女はそこで、力無く笑うことしかできなかった。

これが姉との別れになると、止まらない涙だけが知らせていた。

❖4：黄昏の娘

こんな男は確かにいない。姉が心惹かれたのもよくわかった。

悪魔に魂を奪われるのが早過ぎる、と我ながら思ったものの、決めたなら話は早い方がいい。さっさと自分の竜珠の後継ぎを生み、後顧の憂いなく世を去って姉に悪魔を引き取ってもらおう。

悪魔は常々、世界の旅に出ないといけない制約があるといい、駆け落ち、つまり一緒に旅に出ることは快諾した。しかし今の彼女に、まだその体力はない。彼女の助けにしたいと悪魔が持ってきた「力」を受け取るためにも、再会の晩に彼女は悪魔と結ばれていた。

床に入る前には無理をしない方がいい、と彼女を気遣っていた悪魔なのに、その後三日は昼夜関係なく抱き潰された。だらだら寝床にいた彼女も悪いのだが、悪魔の持つ「黄昏の光」が彼女に遷るまで何度でも体を繋げる必要があったらしく、先に言って下さい……と四日目の朝に悪魔の腕の中でぼやいた。

「——え？ 旦那様も、元々は『空の光』の一人だったのですか？」

住屋の裏にある井戸で彼女が水あみをする間、悪魔は見張りに立ってくれた。家で湯を沸かしても良かったのだが、ずっとこもっていたので冷たい外気と水に当たりたかった。
「ああ。『黄昏の光』は元々俺に降りたものだ」

空の光と大地の闇の境。赤い地平が悪魔の坐す星そのもので、「心眼」という異端の眼を持った悪魔は、「力」ある全ての化生の分析と介入ができる。「力」に対してあまりに何でもできる眼であり、「力」ある者の心象も無差別に覗えてしまう眼に疲れた悪魔は、「黄昏の光」を自ら分離して「心眼」を弱めた。

「『心眼』は厳密には預言ではなかったから、それだけで無効にすることはできなかった。それでも大分楽になった。だから貴女のように、目端の効くヒトの苦しみには共感する」
それならこの度、「黄昏の光」を受け取った彼女の目力は強まるのだろうか。体は確かに少し楽になったが、気になってくる。

「貴女の体に足りないものは熱だ。火の血を継ぐのに熱源へのつながりが弱く、体が異なる反応を起こしている」

「……？」

「ごく簡単に言えば、貴女は本質である水の命から熱を生んで、火の血を起動している。それが動けば大きな光を生み出せる卓越した『意味』の持ち主だが、水の命を燃やすことは、並大抵の才能ではない」

何やらそれは、命を分解してまで火の元となる熱を作っているらしい。わけが解らない。

「普通はそのような無茶な力の制御をしない。逆鱗がそうさせない。しかし貴女の逆鱗は、貴女を止めるどころか命を消費させている」

「そうなんですか……あんまり逆鱗の存在感、あったことはないんですけど」

自然の大きな「力」を持つ竜人達で、特に竜珠を持つような強い者には喉や額に逆鱗という刻印が顯れる。彼女にも一応あるが、姉と違って強い力を使う時に光ることはない。

淡々と言って、井戸の傍から上がってきた肌着の彼女に、悪魔は背から体を拭く大布をかけて、どこか哀しげな顔になった。

「それが貴女の本当の故障だ、アルン」

「——？」

「貴女は生きていることを辛く思っている。逆鱗は主の辛さも救おうとする。貴女の心を救うために、逆鱗は貴女の発散を止めない」

ぽかん、と顔だけ悪魔の方に振り返った。彼女の肩から頭を拭いてくれながら、悪魔はふう、とため息をついている。

「預言の力が多大な気の澱みを引き込む度に、貴女は『力』を宙に発して心を疲れさせて、何も感じなくさせている。そうしなければ、正気でいられないのだろう」

「——……」

「貴女が『力』を発することは止められない。黄昏の光は、貴女に少しでも熱を補充する。貴女の命を削る具合が減るように」

「けれど、と。大切そうに悪魔は付け加えた。

「貴女が本気で拒むような無理やりの延命はしない。貴女を別のものに変える気はない」

これだから、この悪魔は……。彼女は答を失って項垂れる。悪魔の言うように、生きることが辛くてそうなっているなら、延命など彼女にとっては不幸な話だと解っている。

彼女自身はびんときていい。そんな風に彼女を優しい眼で覗む悪魔がいて、今度は前に回って温かく大布を当ててくれる。ここにあるのは日々強くなる悪魔への思慕ばかりだ。

「……旦那様は、今は、辛くないですか」

「？」

「貴男が覗いているものを、本当に理解できるヒトなどいないでしょう？」

「空の光」の受け皿を探す悪魔。要するに彼は、自身と同じ境遇の者を探していたのだ。

「ヒトはいない。俺から削られた『心眼』を奪っていったものはいる」

「……じゃあ」

「魔導師にも同じ視野を覗せることはできる。今は貴女がいてくれる。それだけで十分だ」

ヒトに理解できないもの。そうしたものを持っていること、それ自体を理解するもの。

大きな布を肩にかけ直してくれた悪魔に、背伸びをして彼女から口付けをした。両手を悪魔の肩に回した彼女を、悪魔も抱きしめて応えてくれた。

「貴男は本当に……悪魔ですか……？」

この「心眼」の男がその異端故に、炎獄に墮ちた空の者であること。それをやがて知る。

後継ぎを早く、作った方がいいとは思った。すぐ離縁してもらおう、そんな初心を余所に、どんどん悪魔を好きになってしまった。竜宮にいる間は休暇という悪魔と愛し合い過ぎて、早々に彼女は身籠っていた。

「う……生まれたらすぐ、ここを出ます……」

「本当にそれでいいのか？ 確かに貴女の体は随分、持ち上がってきたのはわかるが」

姉がまだ複数の見合いを並行する中、婚儀もせず何と軽薄な妹だろう。自己嫌悪に陥る。身籠ったこともギリギリまで知らせなかった。竜人の子供は早ければひと月で生まれる。

「アルン……？ 旅に出ます、探さないで？」

そんな置き手紙で彼女は去った。必死だった。

姉は彼女の幸せを妬んだり、悪く思ったりするヒトではない。だから余計に辛かった。悪魔に愛されて彼女が幸せを感じるほどに、これは姉に与えられてほしかった、と思ってしまう。悪魔が眠っている時には偶に出る、白い髪の魔導師にも話してしまった。

「まぁ、裏切者って罵られた方が、こっちの気は逆に楽かもな。オレも人のこと言えねー」

だよね……と二人で頷き合う。謝りすらもできることだった。姉が悪魔と相談して、姉の責任の下で示された道だ。

生まれた赤子に黄昏の光が彼女から遷り、悪魔の旅についていく体力が怪しくなった。彼女は結局、元の山村に戻ったのだった。

黄昏の光に彼女より適合した娘は、彼女と同じ茶髪に竜人の青い目を持って生まれた。

「光の受け皿でありながら、強い水の子だ。貴女の『桃花水』に間違いなく適合する」

悪魔の出身地付近の言葉で、名前の候補をいくつも考えててくれた。青い空の意味を持つ、セリュレエン、アジュール、セレストなどだ。

「貴女の体を助ける、他の方法を考えないといけない。一度一度の旅がおそらく長くなる」

「はい、旦那様」

悪魔のことは愛している。生まれた子供も、己の手で守ってやりたい。その想いが彼女を変えた。

もしもそれがあくどい方法であったとしても、延命を受け入れる、そう伝えた。

姉がいつも、気丈に在れる理由がわかった。我が子を守る、その想いはちっぽけな自分の悩みよりずっと強い。頼りない小さな両手で子供が彼女に抱きつく度に、自分がどうでもこの子は笑っていてほしい、と思うのだ。

「アカ、大丈夫かな……」

思えば姉は、歳の離れた小さな妹を守る、その想いで力を得ていたのだろう。現在では妹よりも体の弱い子供がいる。誰も頼れない、だから自分が守る、それが姉の心の柱だ。

寒冷の大地の山村には人間が多い。それで逆に悪魔の突出した気配は、周辺地の様々な勢力に見つけられやすくなる。悪魔は山村にいる時には白い髪の魔導師で過ごしていた。

大人しくても利発な娘は、山村の人間にも可愛がられ、不在な父や虚弱な母の代わりに、人間達から生活の術を教えられて育った。

「お母さん！　川を二つに分けたら、みんな喜んでくれたよ。後は流れの調節を手伝うの」

「そう。セリュンは凄いね、ありがとう」

彼女が果たしていた役割もすっかり、僅か七歳で引き継いでくれた。秩序の逆鱗を持つという娘は幼子には思えない聰明さで、父と思っている魔導師のように理性的だ。それでいて家にいる時には虚弱な母に始終くっつき、黄昏の光の熱を分けてくれる。

娘とこの地にいれば、彼女は安定していた。

悪魔もその姿を見込んで、今度は長い旅になる、と言った。

「知り合いの天女の羽から天使を作る。そのために媒介の扇と杖を入手し、世界樹を使う」

だから彼女に、隠し続ける背の翼を悪魔に渡してほしいと言われた。天使の素体を作り、悪魔の属する炎獄で彼女の翼を移植し、彼女の新たな器とするというのだ。

「貴女の体が限界を迎えたら、貴女を逆鱗に収めて、新たな器に遷す。ここ数年の世界を観ていると、天上人と地上の化生の不和で、自然災害が度々起こっている。この地にもし干ばつが起これば、貴女の体はもたない」

彼女が持っている天の翼。

この話を聴いた時に、彼女を不意にある衝動が襲った。悪魔はそれを知らないまま、彼女から翼を預かる。

もしも干ばつの災害が起これば、彼女の体は一年もたない。けれど何も起こらなければ、細々悪魔を待つことはできる。だから悪魔は世界の情勢に気を付けておけばいい。

娘が既にかなり竜の「力」を使えるものの、七歳の幼子と虚弱な母を残していくのだから、悪魔は魔導師に頼んで自身の眼を抉っていた。この家に在る妻子を守る魔道を込めて。

しっかり者とはいえ、七歳の娘にはさすがに、父がいつ帰るか判らないとは言い難い。早く帰ってくるといいね、と濁していたが、数年後に父の眼を見つけてしまった娘は、心が不安定になった。父を探して山野を回り、そしてその果てに、禁断の誰かに出会う。

落ち着いた茶から夕紅のような髪になって、娘が帰ってきた。彼女はそこで、かつて白い髪にみえた時の姉の姿をようやく思い出した。

——アルン。あなたを助ける方法がある。

いったい誰が、姉にその反則を教えたのか。

世界の覇者たる天上の長や魔王程でなければできないはずの、「力」の翼を動かせるもの。彼女にもそれを提案した悪魔や、悪魔の眼をかつて奪ったというものなら、姉の翼を彼女に遷して、片翼を両翼に変えることができた。

娘の髪に、そうして彼女を救った何かがいた。

「……『無色』……」

運命の足音が迫ってきていた。それは多分、彼女の逆鱗が見ていた預言の夢を携えて。

❖ 5：黒い天使

何を言うことも自らすることもない、無色の「力」が娘についてきた。

娘は父の悪魔と同じ「心眼」の素因を持っていたから、その反則を視つけることができてしまったのだ。

父の眼をこっそりと持ち出した娘が、そこまで追い詰められていると気付いていながら、彼女もすぐ対応できなかった理由があった。

「嘘……まさか、姉様が……？」

竜宮に酷い干ばつが起きた。この大陸の事ではないので、悪魔は帰っていない。彼女に影響がないはずの竜宮の災害は、彼女の大切な相手の命を奪っていた。

「そんな……だって姉様は、水だけの竜じゃないはずなのに……」

伯母からの手紙の話で、信じられなかった。竜宮諸侯への影響も考えられるために、当面極夜の長の死は伏せられるとも書いてあった。だから彼女も、内々の葬送に里帰りすることは叶わなかった。

「なんで……うそ……やだ、姉様……」

彼女の方がずっと弱かったから、あの姉が先に逝くなんて考えたことがなかった。その知らせを境に、彼女の心は崩れた。

隠された死を知らない悪魔も、彼女を支えに帰ることはない。娘は突然弱った母に驚き、知り合った反則の「心眼」の無色に助けを求めてしまう。

そして彼女は、今まで彼女の逆鱗が存在を主張しなかった理由も知った。

その日から彼女は、多くの夢を見るようになった。自らの「力」で無意識に抑えつけていた逆鱗の夢を、もう閉ざせなくなったのだ。

彼女にあった預言の力は、ヒトなどの今を覗るだけのものではなかった。彼女が正気を保つために、本当に遠ざけていたのは毎夜の預言の夢だった。

おいで、おいで。かわいそうな、わたしの鏡。

地上で虚弱な我が子を抱きしめる姉を、その黒い夜が天から呼んでいるのが見えた。

——助けてあげる……こっちにおいで？

姉にもあれから、「極夜渦」を継げる末子が生まれていた。そちらは順調に育っているが、第二子は弱る一方、と姉の手紙も来ていた。この二人だけは守りたい、そう綴られて。

夢に出てくる黒い夜は、天まで引き上げた姉を松明に変えた。その火でずっと、虚弱な甥を照らしている。

だからまだきっと、あの甥の訃報は届いていない。そもそも姉がそうして知らずに命を分けてきたから、本来なら生まれることも適わない者が生を受けた。

辛うじて水の系譜な甥を、姉は干ばつから守ったのだ。自分の先の命を渡してまでも。そんな現実が夢の端々から伝わってくる。

——ごめんなさい……あたし……。

そこにはもう一人の玄い夜がいた。自身の器である天女を黒い夜に明け渡して、黄昏と天空の器の天女まで黒い夜は取り込んでいく。

そうして生まれた黒い天使が、かつて彼女の背にあった銀の翼を受け、黒い眼を開けた。三人の天女の羽と銀の翼。四つの顔を持った黒い十字架が生まれ落ちた。

玄いだけの古の夜より、黒い夜には小さな星の加護があった。空の光を受ける者達へ、黒い夜は世界の果てから警鐘を鳴らす。

——どうして貴女は、嘘をついたの？

彼女の方を見て、憐れむように問いかける。その歪みが岐路なのだと、これから彼女達に訪れる魔の運命を嘆くように。

——この翼では、貴女の縁とならないことはわかっていたでしょう。そのことをアステルに言わなかつたのは、何故？

黒い十字架の核となつた、彼女が背にしていた翼。それは本来姉のものであることを、彼女の新たな器を造りにいく悪魔に、彼女は告げなかつた。

まるでそこには、彼女に凄く怒っている姉がいるようだつた。

「私、は……私よりも、姉様に、そこにいてほしくて……」

紅い肩掛けに身を隠すように、夢の彼女は立ち竦んでから膝をついた。知らないでいたはずなのに選んでしまつた、預言の夢の衝動。

「姉様……連れて、いって」

黒い十字架を背負つた姉に、身勝手な手をのばしていた。

震える手を泣きながら掴んだのは、彼女を夢から連れ戻した娘だつた。

「お母さん、大丈夫？」

「……——……」

姉の訃報を聞いてから、一週間は寝込んでしまつた。娘が何度も出かけている足音は聴こえていた。

「セリュン……どうしたの、その髪……」

十一歳になつた娘。毛先を木切れに巻いてあえて癖をつけるなど、お洒落をする年頃になつてゐたが、髪全体の色が淡く落ちてゐるのはさすがに目を瞠る。

娘はそこで、もじもじと後ろに振り返つた。

「……あのね、お母さん……今日から一緒に暮らしたい、妹がいるの」

娘の髪に、「心眼」を使う補助となる無色が宿っただけではなかった。

帰らない父の眼を持ち出して偽りの逆鱗に作り変え、「桃花水」の竜珠を基盤に、娘が無色と共に創り出してしまった小さな竜がそこにいた。

「……——」

「アジュっていうの。私の双子なの」

娘と同じくらいの背丈で、まっすぐな空色の髪をさらりと流している少女。大きく鋭い青の目は、娘の竜の目が元だとわかったが、わざわざ双子だと娘が呼ぶのは、そう言ってこの少女を必死に連れ帰ってきたのだろう。

全身が泥水のように重かった。彼女がこのまま弱っていけば、娘は一人ぼっちになる。心を立ち上げられる自信がなかった。

竜珠の少女は、どうして自分が目を開けているのかもよくわからなさそうに、娘に手を繋がれたまま虚ろに立っている。

「あなた……確かに、シリュスの面影がある」

娘と並んだ少女の頬に、病床から触れた。彼女に似た実の娘と、優しげな悪魔ではなく魔導師の鋭い目付きを持った少女。

この目はおよそ、竜人の自然な光ではない。それでも隣で胸をどきどきとさせている娘は、母親の受け入れの言葉を待っていた。

「……アジュールね。私の、可愛い娘」

実の娘の顔が、ぱあっと明るくなった。

少女はきょとん、としている。何かの強い「力」ではあるのだろう、一つ間違えば世を脅かす暴徒になりかねない高次の気配がある。どうやって娘と出会ったのか、娘がおそらく眠れる「力」を視つけてしまったのだ。

「無理に起こしてしまって、ごめんね。でもこのまま、セリュレエンの傍にいてほしいな」

わざわい
禍の芽であると、うっすらわかっていた。預言の夢が彼女を侵し始めていた。

「アジュ、来て！　水を汲みに行こう、村のみんなにも紹介するから！」

物言わぬ少女を、娘が引っ張っていった。その賑やかな後ろ姿だけが救いだった。

初めはどうなることかと思った。姉を失い、落ち込み続けていることが娘にも悪く、出口のない彼女の暗闇に、意外にも竜珠の少女はそっと寄り添ってくれた。

「……母さん。お水」

娘が山村の手伝いに出かけている間、何も人里のことがわからない少女は彼女といた。

娘の溺愛にほだされたように、少女は段々喋るようになった。彼女も起き上がる時間は寝台に少女と一緒に座らせ、娘にも使った絵本を読み聞かせるなど気分転換ができた。

「ねえ、母さん。悪い奴は、罰されるの？」

「そうだね。でもね、母さんみたいに、悪いことをしても逃げちゃうヒトもいるよ」

悪いこと？ 少女が彼女を見て首を傾げた。

「母さんは、旦那様を騙したの。今だって、旦那様と何とか連絡を取れば、きっと帰ってきてくれるのに」

「……？」

「でも今は、やっと、姉様が旦那様のそばにいるの。そう感じるの……私は姉様に、何も返すことができなかった。短い間だけでも、姉様には、大切にされていてほしい」

力無く笑う彼女を、少女が見上げた。その青い目に、何故かじわりと涙が浮かんだ。

「母さんは……優しいよ？」

無表情でも確かにそこに、彼女の悲しみがあった。誰にも伝わることのなかった暗闇。

無色の助けて、おそらく「力」には何でもできるようになっていた娘に、彼女は弱音を言えなかった。心配をかけられれば娘はきっと、彼女のためにどんな事でもしてしまう。

もしかしたら本当の歪みは、幼い頃に死ぬはずだった彼女が、姉の翼で命長らえたことかもしれないかった。姉がよく読んでくれた、「夜」の絵本を思い出した。

——夜の神様は、いつも光がほしいのです。本当は空であるはずの、夜の神様。夜は空に、光を奪われてしまったのです。

空とは、人世を覗続けていく世界の眼だ。光でなく空の因が悪魔にある限り、「心眼」は消えない。無色もそうして同じ、空の何か。

幼少から兄も引き離され、淋しい姉は無色の反則で妹を助けた。男の子しか生まれず、虚弱な子も死産にしなかった姉。「桃花水」という竜珠を持つ妹がいなければ——その珠が妹の死後に姉の力になれば、女児も生まれたのではないだろうか。悪魔を悪魔と気付かず、恋したままに結ばれてしまうことで。

彼女が姉から、娘を奪った。そんな彼女の罪を示すかのように、無色が彼女の光、娘を奪った。

娘の「心眼」が育てられなければ、竜珠の少女など創れなかった娘は、親離れができないからだろう。弱った彼女に付き纏い続けて、彼女の体は光を受けていたはずだ。

けれどそれで良かった。それが夢で解った。

母さん、と。禍の黒い夢の中で、空色の髪の少女が笑った。そこには二つの夢があった。一つは娘が魔物になる夢。何かで娘のそばから姿を消した竜珠の少女と、魔導師の父を娘は手段を選ばず追う。結局父に鎮められて我を取り戻すが、それまでに多くを傷付けてしまい、自身の幸せを望めなくなってしまう。

もう一つは、竜珠の少女が魔物になる夢。こちらも多くの者が犠牲になる。それでも何とか、生き残った娘は幸せになる。

そんな二つの夢を負って来た空色の少女は、大丈夫、母さん、と笑った。セリュンはこれから、あたし——あなたの悲しみが守る、と。

甥が死んだと、知らせがあった。干ばつも特にない平常時に、またも急な手紙だった。
「……あなたも選んだのね。アカ」

混血でも竜人らしかった姉には、おそらく最後までヒトの心が解り切らなかった。

現在、悪魔のそばにあるだろう黒い天使に姉が宿るように望んだ妹の心も、命を全て託してきた母に、甥が命を返すのを望んだ心も。

これで黒い天使はただの死者の残滓でなく、命ある黒い十字架として眼を開けただろう。預言の夢には、少しずつ育っていく黒い児女が、悪魔の隣に映し出されていた。

「……愛しています。姉様……旦那様」

そして彼女の住む大陸を、干ばつが襲う。

ENDING

不自然な極光が、世界樹に近い地に起きている。それを聞いた時から、悪魔には胸騒ぎがしていた。連れ合いが住む地域の異変。

妖精が守る世界樹とは、光と闇を併せ持ち、天使や妖精の母体となる新参の高位存在だ。世界樹を使って連れ合いの器を造ったのだが、理をねじ曲げる彼を嫌う妖精と敵対したため、世界樹付近には容易に戻れなくなった。

そうまでして作った連れ合いの器——黒い天使は、初めには何の感情を見せることもなかった。極光が起き始めた時期から、黒い天使に表情が生まれた。そのことの方が想定外だった。

「何か辛いことがあったのか、アルン……？」

空っぽの器のはずの黒い天使が動き出し、心をすぐに消す決断を悪魔はできなかった。

原因が解らず、連れ合いに悪影響がないとも限らない。しかし不安定な黒い天使を連れた状態で妻子には会いに行けず、悩んでいる内に時間が過ぎて、世界樹のある大陸を非常な干ばつが襲うことになった。

「よりによってこんな時——」

極光の乱発だけなら連れ合いは死なない。本質でない火の血を動かすには限界があり、倒れて大人しくすればぎりぎり生きられる。

しかし水の枯渇がそこに加われば、ひとたまりもない。天上人と世界樹の紛争が契機だった。

天上人の関わる自然災害は、一夜で起きる。

誰よりも早く、三日後には飛竜で駆け付けた。しかし彼は、間に合わなかつたのだろう。

連れ合いの山村を上空から見て、娘の黄昏の光や連れ合いの暁の光、二人の逆鱗の氣色が視つからなかった。置いてきた眼の力すらも視当たらず、娘が「無色」に隠され、個々の逆鱗や彼の眼を改造したこと、不自然な妹を隠すため隣山に移ったことも知りようがない。

黒い天使がいることや、妖精などの感知も困るので、山村は諦めて竜宮に飛んだ。そこで極夜の長姫が死んでいたことを知る。

「アルンは、最後の手紙では、非常に調子が悪いとセリュンが書いていましたが……」

その後音沙汰はないという。想定外の連続。

極光の異状も消えた。あの連れ合いが、姉を亡くせばどれだけ辛かったかは推して知れた。

その少し前から、黒い天使が初めて言葉を話した。銀の光がはっきりと翼の形を成した。そして飛竜にしか話しかけない児女になった。

「……とりあえず、娘達を探しながら育てる」

悪魔はともかく、魔導師は児女を可愛がり、どれだけ無視されても見捨てず話しかけた。

児女はただ一言だけ、悪魔に言い捨てた。

「……死んだと認めたくなくて、逃げるくせに」

そして彼らは、世界を旅するだけの生活に戻った。生死のわからない娘のことは、いつまでも想いながら。

暁夜曲 -了-



Many thanks for your visit

-INFOMATION-

ご覧下さりありがとうございました。

本作『暁夜曲』は一応単独完結ですが、この物語は拙作 Dragon シリーズの、D0『黄昏紅花』の前日譚となります。

『黄昏紅花』は「暁」の娘、セリュンが主役となり、本作同時収録で次章『黄昏千夜』の背景がわかる仕様になります。

『黄昏紅花』→(<https://slib.net/122530>)

本作含む黄昏シリーズ自体は、拙作 Cry/シリーズ『雑種化け物譚A』の流れを多く汲みます。

『黄昏紅花』は『雑種化け物譚』より前の話ですが、本作収録『黄昏千夜』は後の話になります。

『黄昏紅花』、『雑種化け物譚』の暗い部分をフォローする話が『黄昏千夜』なので、もしよければご覧ください。

『雑種化け物譚A』→(<https://www.novelabo.com/books/6331/chapters>)

X: 淑 (sai)@kazari_sou Studio ***46

【黄昏紅花】※協奏-excerpt-

アステルでなく、シリュスと呼んでほしい。さっきまで腕の下で泣いていた空色の髪の彼女に、男はそんな人でなしの寝言を言った。

「しっかしあんた、本当に竜珠から作られたヒト？　こんなに柔らかくて温かいの、アリ？」

「……ヘンタイ。あたしは生き物なんかじゃないのに、こんなバカな真似を」

「それを言ったら、オレだってどこの誰っていう話。お似合いじゃないの、オレ達？」

強きと弱きが和さない原始的な世で、泣くのは概ね女子供。そんな怨念の断罪者は、「母」のための復讐を「意味」としていた。

お母さん、と泣く黄昏の娘に出会い、父を罰しようと思った。しかしその母を苦しめていたのは、母自身の「力」だった。

向かい合った彼女の素肌の、胸の間にある青い逆鱗を男が触る。

「オレの代わりにセリュンを守ってくれて、感謝してる」

真上に何度も口付けを落とされた。昔の少女なら嬉しいなどと感じることはなかった。

「守ってなんか、ない……守られてたのは、わたし……」

そんな在りし日の夢が、凍える水底で彼女を呼んだ。

体が冷たい。真っ暗な所で全身が黒い泥にまみれて呼吸ができない。

己が醜い魔竜になって、禍を起こした。

早く誰か、自分を殺して。お願い、姉さん。ただそう叫び続けていた。

生き物でない彼女に生まれた心は、他でもない「彼女」の悲しみ。そして姉は、彼女を逆鱗ごと連れ出してくれた。

愛している。姉にも最後まで言えなかった。

愛した者の眼と名前を、彼女は永遠に抱く。

ただその心を憶え続ける。月夜の獣と共に。

【黃昏千夜】Over the Skylight

プロローグ

心というものは何なのだろう。世界の理、魔道を学んだ彼にとっては、ある存在の設計とそれがもたらす記録に過ぎない。

生き物と物の違いは、心の有無だという。たとえば何か厳密に設計された構築物が世にあったとして、それがどう存在したかの軌跡が、そのもの自体で記録、設計への影響力がなければ生き物ではない。設計図かつ構築物で、更に本質変容機能をもつもの。それが心。

ただの物なら、壊れたら終わり。付喪神が憑いていても、その物自体にある「意味」は使い捨てで、輪廻や流転のないものが物。

物でも生き物でも、存在する世界に影響を及ぼし得る力をもたらすものが魂魄だ。

心のない物の怪は有っても、魂魄のない生き物は有り得ないもの。いても世界に己を顯せない。

魂魄の器を体とすれば、それらが紡ぐ「力」の核が心、心の器が靈となる。魂は体と心を繋ぐ。

靈とは「心靈」とよく言われるよう、生き物でなくなったものにも死後のカタチを与える。「生き物」に永遠があつてほしい多くの人々の願い。彼はそう思っていた。

「待っていました……愛しい旦那様」

「……は？」

これはその、「心靈」の世での物語。

彼が彼で在れる僅かな日々が、暁の光の下に訪れる。



❖開幕

この事態は誰もが予想外だった、と。その「墓場」で最初に彼を視つけた灰色の癖毛の少女が、にこにこと彼の腕に掴まりながら、謎の状況を説明するのだった。

「まさか、月の青女様がこんなに早く紫竜を手放すなんて。^{せいや}青夜様まで墓場に還られて、私に暁の光を渡して下さったんです」

「……？？」

「ずっと探していました、お父様。お父様に飛竜の縁がある内は、一緒にいられますね」

はあ。魔道の知識はあるが、自身の記憶が何もない彼は戸惑うしかない。

記憶どころか、今の自身の姿もわからない。少女は飛竜がどうの、お父様だのと言うが、少女が何者なのかも彼にはわからない。

とりあえずここが死後の世界で、彼はもう死んでいるので記憶がないのだと、少女には説明された。少女とその母が彼を待っていたというので、彼は妻子に先立たれた魔導師ということだろうか。

「とりあえず……あんたは何て呼べば？」

「ロゼです、お父様」

これは聴こえるな、と首を傾げながら頷く。彼自身の名前をきくと、何故か答える少女の声に雑音が混じって聞き取れないのだ。少女もそれは残念そうにしていた。

オレは本当にあんたの親なの？　まっすぐそうきくと、少女は蒼い眼を少し逸らした。
「お父様でなければ、私のことは見えません。でもお父様そのものとも言い難くて。それはお母様にも同じことが言えます」

「……？」

「ここは黄泉です、お父様。生きていた頃の情報に、本当は大きな価値はないんです」

なるほど、と、存外に怜俐な少女に頷いた。もしも本当に彼が心靈という存在であれば、それはあくまで彼の本質であり、実際に世で生きた彼の魂魄がどう在ったかは別の話だ。魔道の素質を持って生まれたとして、魔導師として生きたとは限らないのだから。

黄泉では番人の錫杖がないと、縁あるものしか互いが見えない。少女は近い仕事をするので、必要があれば視る力はあるらしい。

その番人の仕事も、紫竜とやらがこれから継いでくれる。これでやっと三人で暮らせる、そう嬉しそうに彼の腕をひいていくのだ。

薄明るく昼夜の変化がない平坦な大地が、彼の今いる「竜の墓場」という黄泉。黄泉という概念自体は、魔道の知識としてはある。

「普通は……ここに留まるんじゃなく、死者は闇に還るはずなんじゃねーの？」

「はい、いつかその時は来ます。でも今は、まだです。それがいつになるかは判りません」
なるほど、わからない。少女は笑顔だ。

彼に会えたことが、余程嬉しそうな少女。娘だと憶えていないのが申し訳ない。せめて懐かしさなり何なりあってほしいものだが、可愛い、そう感じるくらいしかない。

「……何でロゼは、オレを憶てるんだ？」

「私は死んでないからです。お母様も」

それなら何故、彼女達はここにいるのか。ますます話がわからないが、抗っても意味はないのだろう。そうして少女に連れられて、少女の母がいるという丘までやってきた。

点々と、申し訳程度に立った常緑樹の下。そこにいたのは、白く長い髪を風に揺らして、袖と裾の広がる白い装束を着た女性だった。

「待っていました……愛しい旦那様」

えらく清楚だ、と初めに思った。こんなに神聖そうな女性が、彼の好みだったどうか。

立ち止まった彼の隣で、少女が固まった。今までの満面の笑顔が消えて、ともすれば、怒りさえ混じった震え声で尋ねた。

「誰ですか……あなた」

いや、母じゃないんかい。それなら彼の嫁ではないはず。そう思ったのも束の間。
「青夜様！　イメージが多分間違ってます、アザーはこんな淑女じゃ多分ありません！」

焦った顔で、少女が何処かに駆けていってしまった。

彼は白い女性と二人で場に残され、とりあえずハハハ、と、何も言えずに笑って見つめ合うしかできなかった。

❖①❖夢から醒めて

ごめんなさい。少女と一緒にやって来た、人語を喋る謎の白猫がまず謝っていた。

「私も何か、今までの表情と全然違うな、と思ったんだけど……実際どんなヒトだったか、今の私は全然知らないんだよう」

「でも、ロゼに魔竜のお話をしてくれたのは青夜様なのに……」

「ごめんね、あなたに会ったこともうすらしかわからない……あの後少なくとも一度は、私も記憶が初期化されちゃってるから」

ぐすん。と、ふわふわ笑う白い女性の膝で少女が涙ぐむ。余程少女の元母と違うらしい。

「暁の光が戻ったら、やっとお母様、喋ってくれると思ってたのに……」

喋ってはいた。しかし、いつも鋭く無表情だった顔も、空色だった髪も違うとのこと。

少女の母には心が無く、「力」だけがここに在ったという。母が生まれた本質は「暁の光」だったために、それが戻れば真の母に会える、と少女は楽しみにしていたのだ。

「青夜」は「力」を運んだり移植したりができる謎の白猫だった。彼の生前を一番よく知っている縁があるというが、「青夜」が話す彼の名前も、やはり上手く聞き取れなかった。

「＊＊＊（白）は憶えてないよね？ 大昔のアザーのこと」

「マテ。かっこ白、って何だ」

そこだけ聴こえた。彼、白猫、白い女性と膝に乗る少女で、現在木陰に座っている。

「何でそこは、聴こえるのよう……じゃあ、○○は憶えてるでしょ、さすがに」

「聞こえねえ。かっこ白を先に説明しろよ」

もー！ と、話が早い白猫の方が、簡単にパニックになりかけていた。

「どこまで聴こえて何が聴こえてないの！？ アザーは聴こえてる！？」

「アザー。あんたは青夜。こっちはロゼだろ」

きゃー、と白猫が総毛を立てて驚きを示す。

「＊＊＊から縁遠い方が聴こえてる……？ これ、＊＊＊、やっぱり消えちゃった……？」

何だか白猫の雰囲気まで落ち込み始めた。最早にこにこしているのは白い女性だけだ。

「白はね、＊＊＊が持つてた青炎。^{せいえん}＊＊＊は氷の飛竜で、＊＊＊自体は蒼くて、でもその蒼がとられちゃったの。もう＊＊＊、飛竜の形には戻らないのかなあ……」

「……それがオレの、竜の墓場への縁？」

「うん、＊＊＊（白）自体は、本当は竜とは言い難いけど。まあそれは、私もだしね……」

しゅん、とする白猫を、何となくよしよしと撫でてやる。少しだけ顔を上げた白猫は、彼の手にすりすりと頬を寄せてきた。

「やっぱり＊＊＊は優しいね。大好き」

何気なく白猫が、そう言った時だった。

にゃ！？ 白い女性が少女を膝から下ろし、白猫を両手で捕まえていた。

「……旦那様に、手を出さないで下さい」

「え！？ 私は＊＊＊一筋だよ！？」

「お母様、確かに二人は近いですが同じではありません。落ち着いて下さい」

笑顔ではあるのに、女性の青い目に冷たい霜が降りていた。どうやら白猫をライバル視している。何のこっちゃ、と彼は困惑する。

「……あんたはオレのこと、誰かわかるの？」

初めて白い女性に彼から声をかけてみた。女性はふっと、笑顔を消した。少しだけ顔を赤らめ、奥ゆかしい声色で応えた。

「はい……愛しい、アステル様」

誰だ。最初に少女にきいた時には、彼の名は聞き取れなかったが、何故こちらは普通に聴こえたのだろう。

「アステルって、オレの名前？」

念のために確認すると、少女がぶるぶると慌てて首を振った。

「違います、それは私の育て親です。青夜様、これって、お母様……」

「あちゃあ。それなら多分、今のこの姿は、『暁』のヒトに近いのかもしれないね？」

そりやそうか、暁の光だもんね、と白猫と少女が考え込んでいった。何にせよ、誰だと感じた通り、それは彼の名ではないらしい。

少し不快だった。そんな自分に驚いていた。

*

とりあえず、状態は解っても打つ手がない。そんな無責任な結論しか出ず、三人と一匹の墓場生活が始まっていた。

「困ったねえ。誰も実際のアザーや『暁』を知るヒトがいないから、どういじればいいかよくわかんない……」

彼ら以外は野山しかない、地平線が見える大地。何だか白猫は、無茶苦茶を言っている気がしてならないのだが、そのつっこみは彼の魔道の知識からわき出るものだろうか。

それはそれとして、白い女性と手を繋いで、何となく草原を歩く少女が首を傾げていた。

「私……何かを忘れている気が……」

彼もどうしてか、時々、胸をつかれるような気分になった。自身のこともわからないのに、何かが足りない気がしてならない。

旦那様、と彼に甘い視線を向ける白い女性には笑い返す。けれど違和感がついて回る。確かに見た目も声も非常に好みではあるが、自分には勿体ない相手、という気がするのだ。下世話なことを考えてしまえば、本当にこの清らな相手と彼は子作りをしたのだろうか。

「青炎って……魔道では、何だっけな……？」

「力」の在り方としては、知っている呼称。違う分類名があったような、と知識を辿る。そしてちょうど、彼のその特性について、ようやく思い当ったと同じ時のことだった。

視野の端で、一瞬の黒い大気が立ち昇った。少女達もそちらへ振り返った。

「新しい番人さんの、お仕事かな……？」

今まで少女達がしていた仕事を、これから新参者が引き受けると言っていた。本来なら彼もすれすれのラインという、黄泉路に迷う死者の排除。彼はまだ＊＊＊が外の世界で、「力」として在るので完全な死者ではなく、それで見逃されているときいた。

ともかく、彼にはそれは見逃せなかった。

「……月の……鬼火……」

え、と、少女が声を出す隙間もなく、彼は黒い大気が見えた方へ駆け出していた。青炎。それは月属性のこと、と思い出した瞬間に。

黄泉という黄昏の極地では、縁ある者しか互いを認識できない。それは自身についても。

今在る彼と、＊＊＊（白）の縁が、きっと魔道しかない。だから魔道の知識しかない。それなら彼は、＊＊＊（白）とは多分言えず、少女に見えている通り、根本は少女の父。「オレは——何の、未練を……？」

先の黒い大気を見た瞬間、居ても立ってもいられなくなった。彼には何か、あの鬼火の主に言わなければいけないことがあった。

白猫が言うように、＊＊＊は多分消えた。それなら彼はどうなのだろう。誰も実際彼を知らない、そんな気がしてならない。

一人で黒い大気の元までついた。そこには蒼い装束で青銀の短い髪を持つ佳人と、佳人のそばに立つ黒い狼の姿があった。

「——いた」

「え？」

駆けてきた彼に、佳人——おそらく番人が戸惑う顔で振り返る。紫竜、と少女は呼んでいたが、彼が気になるのはそちらではない。

「あんたは、月の……ごめん、あんたの名前も思い出せない」

佳人が動こうとしたのを、黒い狼が上着の裾を噛んで止めた。どうやら新人番人である佳人を、黒い狼が指導している。彼が会いたかったのは、その黒い狼だった。

「思い出せないけど、あんたには謝らないといけなくて。いつか言おうと思ってたのに、あんたが死んじまったから、言えなくて」

はい？ とぽかんとする佳人の下で、黒い狼がじっと彼を見つめた。その鋭い裂眼にはもう、彼の脳裏に浮かぶ女性の面影はない。

「約束を破って、ごめん。そして……あんたがそばにいたのに、気付いてなくて、ごめん」

胸が刺されるように痛くなった。彼は多分、脳裏に浮かぶ女性を、かつて裏切っている。

そしてその後も、死んだ女性の心が彼の近くに現れた時、その女性だと判っていなかった。

あの時起こった悲劇。それは彼のせいだ。何の悲劇かもわからないのに、そう思った。

小さな黒い髪の児女。その首が暗い森の中に落ちている絶望の光景が、彼によぎった。
——わかっているんでしょう？ 私と貴女は、災いとなる。

彼らの都合で勝手に「神」にされ、そして黒い獣に落ちた児女があった。それは元々、彼と契りを結ぶはずの「月」の女性だった。

そこまで脳裏に浮かんだ時に、場に少女と白い女性、白猫が追いついてきた。新人番人はますます驚き、少女はそれ以上に驚愕する。

「セレネ様……！ 私、どうしてセレネ様のこと……！」

黒い狼が数歩ひいた。白い女性は少女の前に、黒い狼と対峙するように出ていた。

白い女性の顔が強張っている。彼は思わず、女性の白装束の袖を掴む。

白い女性は斜め後ろの彼には振り向かずに、黒い狼に対して今までとは違う声で言った。

「……戻ってきて……姉様」

はっ、と少女が白い女性の背中を見上げる。黒い狼を見つめる母の、髪が空色、白装束が黒へと徐々に変わっていく。

彼もその横顔をまじまじと見た。そこには確かに、彼も望み続けていた誰かの青い目線。それは一層、彼を＊＊＊から遠ざける想い。

「あたしには……あなたがいないと、だめ」

静かに、そして強く黒い狼に伝える。黒い狼も観念したように、腰を下ろしていた。

忘れていたのが信じられない。新人の番人から黒い狼を返してもらって、少女が狼の身にすがりついて座りながら嘆いていた。

彼らの基本的な居場所は、小丘の木陰だ。この木は桜であるらしく、傘のような大きな樹冠の下で全員が影の中で座る。

「黄泉こわい。ちょっと縁が離れただけで、ロゼほどの眼があっても初期化なしに記憶が薄れるんだあ……」

白猫があわわ、と少女の後ろで縮んでいる。記憶はないが黒い狼にはよく怒られたことがあるらしく、無意識に苦手感があるという。それほどこの狼は誰にも縁を持っていたもの。

黒装束になった空色の髪の女性は、その後ほとんど喋らなかった。唯一、黒い狼に再び頭を下げた彼を、少し不満げに見返してきた。

「でもとりあえず、これでアザーは戻ったね。自分を知ってくれるヒトの近くにいたら、このままでいれると思うよ」

「お母様。……ロゼの名前を、呼んで下さい」

じつ。黒い狼に心ゆくまで抱きついた後、眼をきらきらさせる少女を母が見つめ返した。

「……ロゼ。……いつも心配かけて、ごめん」

ぶわ、と少女の両眼に大粒の涙が浮かんだ。初めて声をかけてくれた母に飛びついでいる。

とりあえず良かった、と彼も笑う。黒い狼に礼を言いたいが、空気を読んで抑えていた。

❖②❖告白

暁の光と黒い狼、そしておそらく、少し前まで白猫の依代だった「〇〇」。

空色の乙女がヒトらしく話すためには、その三つが基本は必要との旨を、改めて白猫が話していた。

「＊＊＊（白）がやっとここに来たの、〇〇と会えたからと考える方が自然なんだよね」

雑音だらけでややこしく、必死に想像する。

まだ「力」が外に在る彼が、どうして墓場に顕れたのか。生き物として＊＊＊が死んだのはもっと前なのに、彼が来たのは最近だ。

「私は〇〇を探してたの。＊＊＊のことは、もう、ここに還ってくるのを待つしかないし」「それ、消えてたら還ってこないって、散々嘆いてたじゃねーか」

う、と白猫が、猫の口を引き結んで唸る。暁の光だけでは乙女の心に足りない。〇〇と＊＊＊両方が揃ったと白猫は思いたいのだ。

空色の乙女について、本来の心象を白猫が憶えていないため、心を観るという白猫でも推測でしか話せないこと。ところがその話を肯定したのは、他ならぬ乙女本人だった。「多分そうだと思う。〇〇・△△△は人間という話が解せないけど、少なくとも、あたしの『力』をひく家系ではあるんでしょう」

自分のことだから正直わからないけど、と乙女も付け加える。確信ではないようだった。

〇〇と＊＊＊は恋仲だった、と白猫が話す。そのため彼が彼であれ＊＊＊（白）であれ、空色の乙女にも〇〇にも縁が強い。

確かに今この乙女は、彼の好みのど真ん中だった。白猫は＊＊＊（飛竜）の方がほしいと言って、ヒトである彼はただ大好きなだけ、と乙女に謎の許しをもらっていた。

「あんまり〇〇と似てないけどな、アザー。もっと笑おうよ、その方が可愛いよ？」

「…………」

とても複雑そうな青い目で、空色の乙女が白猫を見つめていた。彼には乙女の鋭い視線が好みなもの、白猫の言うことも一理ある、などとつい思ってしまう。

もうすっかり、人語を喋る白猫の存在には慣れてしまったが、よくよく思うと「心」を視れることといい、変な異端だ。黒い狼は「神」だというがひたすら無言で、それでも彼以外とは意思疎通ができる。空色の乙女をじっと細い眼で黒い狼が見つめて、乙女は無表情のまま深く頷いて返した。

「とりあえず、〇〇は、姉さんの子孫で心も近いはずの人間。『青夜』が宿れるのなら」「え？ 私、色んなものに宿れるよ？」

何の話をしているか、白猫がどうして首を傾げているか彼にはよくわからない。ただ、空色の乙女が現在の姿で妥当かについての話なのだと、文脈だけを読んでいた。

黒い狼を返してもらった代償に、新番人に灰色の癖毛の少女が仕事を教えに行って いる。昼も夜もないこの地では時間が全く判らないが、絶対適度に帰ります、と言って 行った。

「ロゼ一人で仕事って、可哀相だろ。番人、紫竜とかやらもこっちで暮らさせたら？」

「……見回りが大部分だからそうはいかない。彼には心眼も神眼も預言もないし」

何か知らないが、とにかく娘か黒い狼か、空色の乙女の力は番人の仕事に必要とのこ と。娘だけを仕事に出しているので、落ち着かずそわそわしているのはむしろ空色の乙 女だ。けれど、お母様達は絶対ゆっくりして下さい、とかたく言いつけられたらしい。

白猫は人世に、しばらく戻るつもりはないと言った。戻れるらしいのが彼には驚きだ。 命の繋がる依代が転生して離れる度に白猫の記憶もリセットされるが、依代次第では依 代の命がある間は白猫も人世で実体を保てる。実体は無理でも暁の光があれば、依代なし に靈体で自由行動できる。依代のある方が記憶が安定する。今の白猫は〇〇といた「力」 が転生する時、また記憶を失うとのことだった。

白猫自身は黒い狼と同じで、ほぼ「神」だ。黒い狼は竜という種族の使う「力」の一つ の体現者で、「力」は世の竜達に使われている。

「神」とは魔道においては、世界の「力」の代名詞なので、理屈は彼にもわかる。

そんな黒い狼から、彼の最初の謝罪に返事があった。

空色の乙女が代弁するため、彼とどこかの小さな林で二人きりになった。

「姉様は、貴男の眼が節穴で、ろくでなしなことはわかってたから、いいって」

「……」

「でも、好きだった、って。もう昔過ぎる話だけど、言って良かった、ありがとう、って」

「はあ、と、一応緊張していた彼の肩の力が抜けた。教えてくれてありがとう、と空色 の乙女に言うと、背中を向けられてしまった。

それきり黙ってしまう乙女。まあ、旦那様と呼んだ相手の過去の清算などを仲介した ら、面白くないのは重々わかる。

「……あいつがいるなら、言っておかないと、あんたに向き合えないと思ったんだ」

乙女の方は出会ってすぐに、彼にまっすぐ好意を示していた。逆に今は笑顔のカケラ も見せないが、今度は彼が素直になれる番だ。

「……覚えてないくせに」

「覚えてないけど、あんたのこと、凄い好み。オレと番になって下さい。可愛いロゼを一 緒に幸せにしよう」

明らかに顔を赤くした乙女が、彼の方へと眉をひそめて振り返った。

「いつまでいるかもわからないくせに」

それはその通りだろう。けれどそんな滅びのさだめは、世の常なのだから仕方ない。

しかし、「神」に迫る「力」で不变だという乙女に、彼も寄せることはできないものか。

「オレも、竜や番人になれねーの？ 飛竜とかいうのは、ここには永くいれない？」

乙女は番人だからではなく、黒い狼とよく似た竜——自然の「力」だから不变なのだ。

「力」が既に自然界のものな黒い狼と違うのは、辛うじて乙女は生者であり、「力」の本体はここにある。人世には乙女の「力」を喚ぶ媒介がある。それが壊れたら乙女の「力」はヒトに使えなくなり、自然界だけに帰属し、乙女も滅びる。「神」に迫っても「神」からは引き離された、ただの竜だという乙女。

「……番人になれるのは、生者だけだから」

「そっか。何にせよ死者なら駄目ってことか」

生者と死者の違いは、魔道的には大きい。死者には変化ができない。彼の現在の心は、最後に生きていた彼の状態であるはずだった。

「なら死者でなく、魔物になる方法とかは？ それとも魔物だと余計ここにいられない？」

「当たり前でしょ。ここにいるものが魔物にならないようにするのが、番人なのに」

生者でも死者でもない魔物は、古い自身を執着だけで保ち続ける。その道も無理なら、結局は彼が生者と死者の流転を繰り返す度、少女と乙女に見つけてもらうしかない。

「それじゃあ何か、オレに目印つけてもらうとかは？ 今回もオレ、見つけられてるし」

「何千年探させるつもりなの、それ」

否定はしない。ということは可能なのかもしれない。乙女の目にも僅かな光が見えた。

「どうせ暇なら永遠に探して何度もオレを見つけてよ。その都度惚れ直すから」

「その度にお別れするロゼが可哀相でしょ」

「そういう心配するあんたがいい母親だから、その辺は大丈夫だよ」

ぐ。目に見えて乙女が反論に詰まる。

「……無責任」

「言う通り。正し過ぎて、やっぱり好き」

最早、理屈もへったくれもない。ただただ、心に浮かぶ想いを並べた。死者である彼には、万一嘘でもこの言葉から己を変えられない。

彼をまっすぐ見ているものの、恥ずかしさが過ぎて答えられなくなった乙女がいた。

「可愛い」

素直に想う。果たして生前の彼は、こうも本音で人を口説けただろうか。乙女との間は三尺ほどの距離があったが、立ちすくむ乙女に向かってゆっくり前に進む。

「さわらせて」

「だ、だめっ！」

「何で？ ロゼがいるならそういう仲だろ」

乙女の手を取り、甲に口付けをして微笑む。
 「忘れてるくせに！」
 「あんたは憶えてくれてるの？ そんなにも赤くなるくらい？」

どうやらわりと、彼と乙女は爛れた関係と見えた。乙女の意識の仕方が激しいからだ。
 「体がそもそもないのに、何言って……！」
 「でもさわれるんだけど」
 「ヘンタイ！ あ、ちょっと、……！」

乙女の腰と後ろ頭に手を回して、否応なく抱きしめてみた。途端に静かになった乙女は、耳の端まで赤くしながら、ふるふると彼の胸に小さく掴まっていた。

「…………」

愛しい旦那様、と。一言目にそう言った心は、乙女の見た目や口調が変わっても同じ。彼の腕の中、肩を震わせる乙女は泣いていた。声を上げないのは昔からなのかもしれない。

しばらく黙っていた。乙女が落ち着くのを待っていると、俯いたまま拙く話し始めた。
 「……アナタが好きなのは、本当にあたし？」
 「——？」

「あたしは……自分が誰か、今も解らなくて」

はて？ と腕の中を見ると、少しだけ顔を上げた乙女が、子供のように心細そうな目で彼を見つめて言った。

「アナタの好みだと感じて、こう振舞ってる。アナタは、正しく在りたかったのに、正しくなれない自分を悲しむ正しいヒト。あたしは、アナタの悲しみ。アナタが幸せにしたかったもの、守りたかったものを映しているだけ。そう言ったら……？」

難しいことを言うなあ。それが最初の思いだった。額をこつ、と合わせて笑顔を向ける。

「オレの好みとか、あんたはわかるの？」

「アナタの眼が、あたしの中にある。○○のことも、多分真似してる。あたしはずっと、姉さんとアナタが望むものになりたかった」

言っていることはよくわからない。けれど、言いたい気持ちはわかる気がした。この乙女はそういう性質だから、当初の淑女にもなる。

「そうだな……オレは実際、あんたの名前もわかってないし」

アザー、と少女や白猫が言っている名前は何度か聴こえた。しかし何故か、それが乙女であるようにはいまいち思えていない。

「あんたがもしも、ヒトの望むようなあんたになれる奴なら……それは悲しいな、と思う」

「……」

「多分オレ、今そういう弱音を言ってくれたあんたが好きだよ。オレのことでも、正しく在りたかったとか、当たってると思う。全然憶えてないけど、妙にしつくりとくる」

乙女を抱く手に力を込めた。温かさなどは感じない死者のはずでも、胸が温もってくくる。

「……あんたが泣くの、オレが悲しいから？」

どうして彼は、この相手を覚えていないのだろう。「月」への未練はわき上がったのに、乙女には「可愛い」のみ。初めに乙女を抱き寄せた時、彼を襲ったのはそんな痛みだった。

「それだけでオレは、救われてる。そういうひどい奴だって、あんたが解ってくれるなら」

……ばか、と、乙女がまた声を曇らせた。すっかり彼の胸によりかかっている。本当に可愛い、と頭を後ろから撫でて癒される。

彼の悲しみを引き受けてくれているもの。今更そんな、言葉だけの実感が染みた。

もう少しだけ二人でいたい。そんな可愛いことを乙女が言うので、手近な木の下に並んで座った。彼の肩に乙女は頭をもたれさせて、地面につく手も重ねている。

「なぁ。あんたのこと、何て呼べばいい？」

乙女は答えない。何かに迷い、ためらっている。

「困ったな。オレも自分の名前が聴こえないし。もう無くていいか、名前なんて」

それは不便ではあるが、彼ら以外ほとんどヒトのいないここで困ることも少ないだろう。二人だけの世界っていいな、と自嘲する。

隣にいるので、視線の合いようがない乙女が、ぽつりと静かに悲しげに言った。

「……アナタは、踏み止まってる。こっちに來たくても、今のアナタも捨てられなくて」

なるほど、＊＊＊（白）のことだろうか。何となく木々の間の天を仰ぐ。

「捨てないでいい。どこの誰かわからない、アナタはそういうヒト」

「それ……似た者同士なんじゃ、オレ達」

ちらり、と乙女がこちらを向いた。是とも非ともれない不服気な目線。そして乙女は、空気だけを見事にぶんぶんと変えて言った。

「ばか、＊＊＊。自分のことも見失って死んじゃって」

○○ならそう言うよ、と元に戻って加えた。彼は呆気にとられ、ついつい訊き返していた。

「あんたとそいつ……同一人物なの？」

「わからない。『桃花水』に居ただけかも」

「どうか……すい？」

それが乙女の「力」を世に具現する媒介。暁の光を持った女性の竜珠という宝で、○○はその「力」を借りられる人間だったのだ。

「桃花。いい響き。あんたの名前、これから『桃花』じゃダメかな？」

えっつ。とても焦った様相で乙女が彼へと青い視線をぶつけてきた。

「そ、そんなキレイな名前、勿体ない……」

「でも、あんたの『力』がそれなんだろ？」

「わからないの。継いだのは姉さんなのに、姉さんがその『力』からあたしを創った……あたしの名前はその時、姉さんが捨てた心」

それがアザーだろうか。何とも微妙な話で、安直なのはダメか、と彼も思い直した。

「じゃあ、ひとまずアズで」

とりあえず彼専用の乙女の名が欲しかった。

彼のことはアナタでいい、夫婦だしと言うと乙女は少し首を傾げて、淡く微笑んでくれた。これが乙女の、運命を示す名前とも知らずに。

*

自分が誰かわからない。それは連れ合いの苦しい言い方だと、彼は気付いていた。彼が求める人々を映せるニセモノ。違うものだと断言すれば、どちらにも救いがないからだ。

彼としては、そこまで気を回せるのはこの連れ合いだけだと思う。憧れと現実は違う。娘である灰色の癖毛の少女が悲しい顔をすると居た堪れないのに、連れ合いの彼女が泣く時にはいつも心が休まる。

「やばい。オレ、相当ひどい奴かも……」

雑念を消すため、一心不乱に草を燃やした。あちこち洞窟暮らしという連れ合い達に、彼がまず思い立ったのは住屋を造ることだった。

重要な材料の草を集めてくれる癖毛の娘が、彼の手付きを見て何度も感動している。

「草から縄って作れるんですね……手の中でどうなれば、こんなに早く出てくるの……」

連れ合いにはまず木を集めてもらい、洞窟の外で黒い狼の鬼火で乾燥させた。水はけの悪くない平地に穴を掘って柱を立てる。釘がないので連れ合いに木の切り方を教え込んで、床と屋根だけは何とか組んだ。そんな即席の掘立小屋を当面の住処にした。

「海があるなら、石灰石を見つけたから、後は鍋と紙があれば石を積んで壁を造れるよ」

雨は降らないので、今の即席小屋で良いのだろうが、彼はどうやら物造りが好きらしい。

生き物はいないので膠が作れないが、木があるからか、海藻が何とか海にあった。それで漆喰を作れたら石の家も長くもつ。と思う彼の人世の発想に、娘が水をさす。

「作ったらずっともちますよ、お父様。まず作るヒトがいないんですけど、ここは黄泉です」

なるほど、それなら適当でいいや。早々に家造りが終わってしまい、部屋割りまで凝ることは不可能だったが、人世の文化を知識でしか知らない娘は大喜びだった。彼にしたら、何故人造物のない黄泉に紙があるのか、そう言えば彼らの着ている服はどこからきたのか、そんな素朴な疑問が後をたたない。

「で、次はロゼの服を作るから、って？」

住居の材料集めに協力してくれた白猫が、今度は竜の墓場に存在する限りの、自然物の収集場所を案内してくれた。

「でもここにあるもの、基本は『力』だよ？ ロゼの服は、全面魔道縫込み衣装でいいの？ ロゼをヒト型兵器にでもするの？」

大真面目にきく白猫に、ハハハ、と笑う。

「まあ一応、万一悪い虫がいたら大変だろ」

「過保護なの？ アザーもだし、それ以上？ まあロゼ自身は『力』が少ないし、いいけど」

彼がそうして、坦々と生活用品を作るのを、連れ合いは隣でずっと物珍しげに見ていた。

「アステルも、アナタは器用だから、いた時は助かってたって言ってた」

娘や白猫はよく番人の所に出かけ、黒い狼は気を使って屋外にいる。二人でしんとした家の中にいる時間が、普段は多くなった。

「……あのな、他の男の名前は普通、夫婦の会話ではあんまり出さないもんなの」

「アナタが言うの？ 姉様とは結構、大昔は仲が良かったって聞いたけど」

寒暖はないので、形だけ作った囲炉裏の横、彼は石を研いで刃を作っている。するこのなさそうな連れ合いが、無表情に首を傾げた。

「アステルはアナタのこと、大好きだったけど」

「それを言うなら、あんたら姉妹同士もだろ」

広くはないが狭くもない、木造プラス石の家。仕切りは土間と扉のある所にしかない。

二人の時間が多いので、夫婦で寝る場所、作る？ と以前にきいた。すると、ここでは地上の頃のようなことをする気はない、と、少し赤くなりながら不服気という、複雑な顔で連れ合いは言った。

「心靈の交わりは神々でもあるけど、それは生殖の代わりに、『力』の受け渡しが起こる。あたしはここでも色んな命……『力』を沢山奪ってきたから、何を持ってるか判らないの」

彼女が把持し切れない「力」が溢れる度に、黒い翼となったそれらを娘が断ち切る。翼になるまでもない全ての不純物を出し切ることはできないので、彼と彼女が繋がってしまうと、彼に何が流れるかわからない、と言う。

「別にオレはいいけどさ、アズはそれで、体とかは辛くないの？」

既に死んでいるためか、明らかな欲情などは彼にも起こらず、今の平穏に満足している。連れ合いが抱える数多の「力」については、娘も常々心配していることなので訊いておく。

「アズが『神』じゃないなら、抱え続ける筋のない命だろ。浄化の魔道を組むことなら、時間をかけたらできると思うけど」

「魔力の主がいないから、多分起動できない。大丈夫、もう慣れてるから」

アステル。彼をかつて宿していた悪魔なら、同じ方法をおそらく使っていただろう。彼女はあえて、今は言わなかっただけで。

彼の代わりに娘をここで育てくれた悪魔は、「心眼」という、世の「力」を観て介入もできる異端の眼を持っていた。彼の娘に同じ素因が、悪魔の実の娘の眼を持っているからあるといった。だから悪魔は娘に、「心眼」の使い方を教えていってくれたのだ。

その話を聴いている間中、彼には頭痛や、話の所々に雜音が絶えなかった。白猫曰く、+++(+)にも同じ眼があったしね、とため息をついていた。***の双子のことらしく、彼には***関連が今でも聞き取れない。

白猫にも「心眼」があると聞いた。しかし暁の光など、白猫に合った「力」や、依代の「力」がなければ視るだけしかできないと。

何となく彼には、この不思議な優しい日々のカラクリが解った気がした。「心眼」なんて、魔道でも存在が怪しいとされてきた与太話だ。その持ち主が二人以上もいれば、こんな反則の幸せも稀には有り得てしまう。

「+++(+)が生きてる間くらいは、オレもここにいられる、か……」

彼を龍の墓場に繋ぎ留める、飛竜という縁。魂を失った飛竜、要は彼の現身を、+++(+)が「心眼」の反則で世に留めている。彼は一足先に意識だけ黄泉に来た、そんな実態だった。

***だった彼はともかく、人間の○○がいるかがわからないのは、靈感持ちがここにいないから、と白猫が残念そうに言っていた。

「私やロゼには『力』しか見てないから、心の方がメインの人間の心靈は判んないの」「でもそれだと、オレは何なんだよ。オレの『力』はまだ人世にあるんだろ？」

だからここにいる彼には、「力」が何も無い。けれど彼のことは、縁者の誰にも見えている。白猫は少なくとも○○の縁者だろうに、○○は誰にも見えていないのに。

「シロは、『意味』だけだねえ。飛竜が失った魂の、半分って感じかな、イメージ」

***（白）が長いので、白猫は彼を略称のシロと呼ぶようになった。犬か、と最初につっこんでいる。何にせよ、「意味」などとはますます、魔道でも曖昧な適性の概念だ。

「意味」とは、天の主がヒトに与えた試練であり、血筋であり才能。魂の外郭を成して、「神」の眼を持つものには大まかに見分けることができる。「心眼」なら、「意味」の根本である「力」が解る。黒い狼が「神眼」の方で、連れ合いにはそのどちらの眼もない。

しかし実際には、彼の本質への言及など、一番周囲をよく理解しているのは連れ合いだ。それは「空の光」がもたらす預言の「力」だといい、もうここにはあまりに、反則の集団が揃っているとしか言えなかった。

「ねえ。することがないなら、一度アナタと、ゆっくり行きたいところがある」

「え？」

ある日突然、珍しい誘いを不意に連れ合いがかけてきた。彼女自身、番人をしないなら何もすることがない暇人で、今まででは眠ってばかり過ごしていたそうだった。

「辛いかもしれない。それでもいい？」

「何で。別に行くのはいいけど、何でオレを連れていきたいの？」

ふっと。彼女がいつになく柔らかな、それでいて悲しげに、彼を遠い目付きで見つめた。

「……あたしの、妹のところ。アナタは……多分、知っておいた方がいいから」

一瞬、彼の意識に、激しい砂嵐がよぎった。その理由を彼は、当の行き先で知ることになる。

連れ合いが彼を連れてきたのは、ひっそりと小さな川が近くに流れて、陽の無い黄泉で薄明るい光がこぼれる森の中の墓標だった。

「…………」

彼にはその、小さな石碑の碑銘が読めない。それなのに誰がそこに入っているのか、頭の奥に黒い髪の若い少女が浮かんでしまった。

「そっか……お前……——」

思わず、石碑の隣に膝が崩れ落ちていた。辛いだろうと言った連れ合いの通りに、彼の胸中を強い炎が駆ける。

今でも自分も、石碑の名前もわからないのに、その墓に眠る黒い髪の少女を失っただろう者。彼の現身を今も留める、十十の想いだけが心臓に在った。

それはどれだけ苦しく、そして痛かったか。

この少女を失ってしまえば、十十が人世で生きていることすら不思議に思う。それほどずっと、大事な相手であったはずだ。だから十十はどれほど、今も痛んでいるだろうか。

「……このコは、〇〇の妹で……その前にはあたしの妹だった、預言の巫女の夢を継ぐコ」

「……？」

連れ合いも彼の反対側で、墓標の隣に膝をついた。石碑にそっと、小さな花を供える。「このコは必ずまた、『桃花水』を求めて世に顕れる。だから混沌に還らずに、ここにいる」死者とは、次に世に出るため新たな魂魄の力を貯める期間だ。普通は皆、混沌に戻る。

世界に存在する「力」達は、生命の流転で遷り変わる。「力」なき人間も、「意味」だけは持っているのだ。混沌に戻らないと「意味」が初期化されないため、同じ自身の「力」でまた生まれる確率が高まる。

「アナタは、どっちを選ぶのかなって。混沌に戻るか、＊＊＊についていくか。十十は多分、混沌に戻ってしまうと思うけど」

「……そうなのか」

今考えても、最後に実際どうなるのかは、その時にならないとわからない、とも言う。

＊＊＊はもう悪魔だと、連れ合いは加えた。それなら＊＊＊の本体がここに来た時には、＊＊＊は番人に排除されるのだろうか。

預言の巫女を継ぐという、黒い髪の少女。竜の血をひいて、「桃花水」の縁者だから竜の墓場に来た。混沌に戻らないという死者は、普通、許されるものなのだろうか。

そこに思い当たった時に、突然、墓標一帯の空気が変わった。はっと彼が顔を上げると、辺りには赤い空と灼熱の砂漠が広がっていた。

「な——」

慌てて対面にいる連れ合いを見る。異様な空気に変貌した竜の墓場で、彼女はぺたりと座り込んで、だらりと俯いていた。その後。

「選ぶといいよ。生ける地獄か、炎獄の夢を」

連れ合いの口から、きいたことのない声が漏れた。運命の水門が開く赤い波音を携えて。

❖③❖赤い地平

怒りという感情を、ここにきて彼は初めて思い出した。一帯を真っ赤な砂漠に変えて、連れ合いの長い髪も赤く染めていく謎の相手。

「おや、気に障ってしまったかい？　このコは君だけのものだとでも？」

くすくす、と口元を細い指で押さえて笑う。無愛想な彼女にない艶やかさで立ち上がった。

「何百年も放っておいて、それはないよね。それでも君を待ち続けるこのコとはいえ」

「……何者なんだ、お前」

「まあ、あまりもたないから率直に言おう。私はアステルの上司で、炎獄の管理者さ」

彼の娘をここで育てた悪魔の名前。しかし炎獄とは何か。魔道の知識では悪魔の故郷の魔界とも少し違って、世界の果ての谷底だと記述される。一説には黄泉の一部だとも。「このコには、私を降ろせる稀有名がある。私はそうだね、アシエルとでも呼んでおく。悪魔も『神』も、世に介入する可能性のある高次存在を監視する、追放天使達の長になる」

「追放、天使……？」

「竜は高次存在ではないが、彼らを凌駕する力を度々見せる。特に魔竜は面白くってね。このコとの取引で、私は魔竜を炎獄に迎える」

魔竜とは、連れ合いの宿業だと聞いた。誰が誰を連れていいくのか、彼の背に霜が降りる。

「炎獄とは、世の生贊が集まる嘆きの谷だよ。アステルにはうちと竜との縁繋ぎを代償に、この地に居させてやった。その結果、魔竜を手にできたわけだ。今度は君と取引をしたい」

「——……」

「魔竜。このコを私にとられたら、君は不快だろう？　私としては、君がいてくれたら、魔竜はきっと永く存在してくれる。だから君には、我々の手中にあってほしい」

何の悪夢だ、と彼は心の内で毒づく。この問答は取引だと口先では言いながら、彼には選択肢など初めから与えられていない。

「聴きたいかい？　このコへの私の影響力を、少しでも排除できる方法を」

現状のように、謎の自称天使が連れ合いの体を勝手に動かすことは、当然拒否したい。

しかしその代償に、彼をよこせ、という。もし彼が炎獄とやらに囚われるなら、連れ合いも結局引きずられる可能性が高いのに。

「あんたさ。オレ達を諦める気、ないだろ」

「ああ、ないよ。だからこれは、私の温情だ」

彼の胸に、連れ合いの細い指が当てられた。ぞくりとするほど、キレイな顔で笑っている。

「このコは現状なら、こうして私に時折支配される程度だ。放置しても問題はない。ここまで言うのは、君の意志で来てほしいからさ」

すぐに選べとは言わないよ、と。そうして、連れ合いの髪は数瞬後、空色へ戻っていった。

唐突に顕れた誰かは、去り際も唐突だった。砂漠となった光景は元の墓標に戻って、彼は体がないのに爆発しそうな心臓を持て余している。

倒れかけた連れ合いを受け止めたので、抱き合って座った状態で、連れ合いはすぐに青い目を覚ましていた。

「……今の数分、憶てる？ アズ」

向き合って座り直させると、後ろめたそうな顔をしたので、体を奪われていた間の事を解っている。元々預言の力など持つ連れ合いなので、自称天使の言う通りに、本当に取引はあったのだろう。

「……ごめんなさい。さっきまで、アナタに言われたことは、全部本当」

「……。ロゼは、知ってるのか？」

「教えてない。さっきみたいに突然来るから、ロゼのいない時だけ、って条件にしてる」

どうか教えないで、と続けた。大事な母が炎獄の天使に操られる時があるなど、心配性の娘が知れば苦しむだろう。一応、ああ、と彼も秘密に頷いていた。

「妹……魔物をここに隠すことの、交換条件だった。最初は、アステルがここにいる代償に、アイツが話すことから始まって」

娘の「心眼」を育てるために、悪魔の存在は必須だった。そして妹。「桃花水」の系譜である預言の巫女は、今生で真なる魔物となって、この墓場に還ってしまったのだ。

「別にあたしに、炎獄へ行けというわけじゃない。魔竜の『力』の、大半は極夜だから、『桃花水』を負うあたしの現身には問題ない」

「でも……アズ自身は、極夜の竜だろ？」

そもそも「桃花水」は、極夜の傍系とく。空の光を受けたという、連れ合い自身は「夜」で、「桃花水」が光を呑んだ。だから「空」の名、アザーは何かが違う、と彼は感じたのだ。

「極夜という概念は、いずれ世界から散るとアイツは言った。あたしを通じて極夜の『力』は、炎獄から発生するようにするって」

「…………」

「それからあたしの体を動かせば、アイツはいつでも魔竜を使える。いずれそうなるだけ」

それは魔竜を、二度と人世にもたらさないよう番をしてきた連れ合いには痛恨のはずだ。極夜の魔竜が廃れていくのは既定路線らしく、後は誰が使うか、という話。

「つまり、アイツにアズの体を使わせない。最悪、『力』を使わせない、その方法は？」

「……アナタが炎獄に、出入りできるようにすること。でもあたしは……賛成できない」

だから今まで話さなかった。それはどの道、彼も連れ合いも炎獄に縛られる末路なのだ。

「あたしはどうせ、人世には禍だから。何も変わらないよ、今までと……何も」

俯いて座ったままの連れ合い。珍しく汗が首を伝っていた。黒装束にすぐに隠れても。

体を使われることは、結構な負荷らしい。呼吸もしばらく荒く、彼はつい尋ねていた。

「アズ。……アイツはどうやって、アズの体、使えるようになったんだ」

「……」

両手をつく連れ合いは、目を合わせない。だから余計に、彼は聞いたくなってしまう。

「アイツ。最初はアステルの体ごしに、アズと話したんじゃないのか？」

「——」

死にそうな目で、連れ合いが顔を上げた。当たってほしくはなかったのだが、彼の胸の悪さはおそらくそれが原因だった。

「アステルと寝て……アイツと繋がった？」

「力」のやり取りをしたくない、と、彼と交わることを避けてきた連れ合い。あの自称天使も「力」の塊だ。悪魔に憑依することも、そこから彼女に遷ることも簡単なのだ。

連れ合いがぶわっと顔を赤くした。そして。

「——ばか！　ばか！　ヒトの気も知らずにアナタは……！」

両手を振り上げて、ばたばたと彼を叩いた。声は本当に怒っているが、顔は泣いている。

彼も正直、内心は怒氣で渦巻きかけていたが、その姿には毒氣を抜かれてしまった。

自分から訊いておいて、ほっとしていた。連れ合いは叫んだ。悪魔の寿命が来た時に、彼女が悪魔を殺してその「力」を受けたと。

「それをすれば、アステルに巣食うアイツに宿られるのはわかってた！　でもアステルの残滓は必要だったし、ないとアナタ達が違う形で人世に生まれるかもしれない。そもそもアステルは、アナタの体だから！」

靈体の交わりでなく、命のやりとりでも、「力」の受け渡しはできる。

悪魔がかつて、彼を宿していたものだから、彼女にとっては悪魔も彼の形見。一片も残さず欲しかったのだと、そこまで彼女は泣き喚いた。

「……ん。疑って、ごめん」

「うるさい、ばか。あたしはあたし一人なら守れるけど、あたしの現身は知らないから」

ふっと。悪寒がもう一度彼の背中を掴む。

「……アズ？」

はっと、口にしてはいけないことを言ってしまった、彼女もそう気付いて声を呑んだ。

「アズ……今の、どういう意味？」

「…………」

思えばこれが、さまよう彼の始まりだった。動搖していなければ彼女も隠したまま、この日々は幸せだけで終わっていたのだろう。

けれど、隠し事とは苦しいものだ。彼女は悲しそうに青い目を伏せて、その夢を伝えた。

「……妹が、教えてくれた。あたしの現身は、アナタとまた人世で出会う。でも……あたしは知らない悪魔の子供を産む。炎獄のものの本質は、悪魔に捧げられる生贊だから」

彼女が言ったことの意味を、彼はどこまで汲み取れただろう。おそらく彼女は最低限度で話が済むよう、極力言葉を選んだはずだ。

頭がしばらく、理解を拒否していた。不義の疑いをかけた彼をぽかぽか叩くほど、彼女には一途さがある。数百年以上も彼を待っていた連れ合いだから、当然の話もある。

「……預言の力の話？」

「うん……そうしないと、誰かが悪魔の子を産まないと、本当の姉さんが頑れないって」

彼女を創った姉は、悪魔の実の娘だった。

しかし今回、彼が人世で出会った〇〇は人間。心はおそらく彼女でも姉でもあるというが、人間には彼女達を再現し切ることはできない。

「それであたしは、空っぽになるって。誰とでも契りを交わして、その相手を殺していく。……夢の話だけど、あのコが言うなら、本当なんだと思う」

「……——……」

それが預言の巫女の夢であるなら。そして、彼女が本当にそんな境遇になった場合には、有り得る話だった。

彼以外に自身を捧げれば、彼女の心を持つ現身であれば、己も、他の全ても憎むだろう。それ程まっすぐな思慕を持つ永遠の連れ合い。

「いや……すげー嫌なんだけど、それ」

彼女も青い顔で俯いてしまう。ここにいる彼女本体は守れても、現身はそうではない。

ここに居続けるのは「力」だけ。彼女の心はいつか、彼が人世に出れば追いかけていく。

「何か、変える方法ないの、それ」

「…………」

連れ合いの妹がわざわざ、暗い未来だけを告げていったとは彼には思えなかった。その未来に抵抗するための話は、他にないのか。

「ひょっとして、それがアイツ……オレに、炎獄に来いって言った理由じゃ？」

「——」

ハッタリだったが、彼女の反応を見るに、当たっていた。

そして彼は今後、連れ合いを散々説得して炎獄への切符——運命の水門に携わる管理者の素因を連れ合いから得る。

彼に炎獄の縁が遷りきた後も、彼は何度も連れ合いを抱いた。優しい日々だった。

炎獄とは、魔道においては世界の果てで、まだ決まっていない運命がさざなみを立てる。

素因だけの炎獄の住人は、その流れに一石を投じる事は難しいが、決して不可能でもない。

「……バカ。こんな素因を持ってしまえば、アナタは普通の輪廻からはぐれてしまう」「でも、これがオレって目印にもなるだろ？ アズは今まで通り、オレを探してよ。オレもアズと、幸せになれる運命をずっと探すから」

ここで彼らは自らの名、運命を引き受けた。

かつての悪魔も、赤い地平の下に立っていた。それは元々、彼の色となる運命かのように。

❖終幕

幸せな時間というのは、いつだってあっという間だ。それでも彼が思っていたよりは、竜の墓場にいられた時間は長くあった。

彼を留めていた、現世の飛竜が死んだ。姿が消えかかる彼に、娘がぐずぐずと泣いている。その隣では白猫までが、ぐしごしと墓標に文句を言った。

「もおー、十十のバカあ……まだ死んじゃダメでしょ、争いも終わってないし、子供を探すために頑張ってたんでしょー……」

十十達の事情を僅かでも知るのは、○○と共に在った白猫だけ。けれど彼は、十十がやっと安らげただろう、と何となく解った。

竜の墓場に来た飛竜は既に魔縁で、だから連れ合いの妹の墓の隣に、隠して埋葬された。

飛竜の石碑の名も彼には読めず、また十十は魔物ではないのでそこにおらず、さっさと混沌に戻っていったのだろう、と白猫が言う。再び生まれるために頑れたとしても、白猫にしか見えないだろうとも言う。

「でもあんたも忘れるんだろ？ 結局」

「忘れるけど、氷の飛竜を探す行動原理は、忘れないようにしたの。そこだけは私も魔物」「なるほど。でも飛竜が氷以外になったら？」

がーん、という顔で白猫が青ざめる。いや、それくらい想定しとけよ、と彼は苦笑する。確かに氷の飛竜は珍しいが、無二でもない。

もう触れないくらいに彼が薄れたので、母とずっと手を繋いで、娘は泣き続けている。
「ごめんな、口ゼ。これ多分、後少しだな」

「……大丈夫です……また探します、お父様」

彼が沢山、娘の服や装飾品を作ったので、いつかそれを持って外界に遊びに行くことが夢、と娘は笑ってくれた。可能なのかは彼もわからないが、他にも竜の墓場に、娘のための図書館を彼は建てていた。

「迷い出る死者も、これからは面倒な時には間に返すまでせずに、あそこに保存します。お母様の負担も減る。ありがとう、お父様」

彼が去る時には、連れ合いは番人の仕事に戻る約束だったらしい。短い休暇だった。

連れ合いがいつまで喋れるのかは、誰にもわからない。○○が混沌に還るか、転生するまでは大丈夫、と白猫は言うが、実際はそう長くない期間だと娘も漠然と察している。

「……いくら、死者の記憶は書に変えられるからって、置き場所まで作ることないのに」

それは実は、炎獄の管理者からの入れ知恵だった。だから連れ合いは不服気にしている。

けれどこの先も連れ合いの「力」は、墓場の死者を狩るのだから、あって損はないはずだ。

「だってそもそも、輪廻や転生は、天の光を拒む愚か者達の所業だからな。たださまようだけの奴らなんて、もっと性質が悪いだろ。オレが言えたことじゃないけどさ？」

おそらくは、千の夜に近い時間を、家族で過ごして解ったことがあった。それは、この程度では全然足りない、そんな己の欲深さだ。

「だからヒトって、また生まれるんだろうな。幸せには色々な形があるだろうけど、オレは家族と一緒にいいや」

「私も！ いつもそれしか望んでないよ」

連れ合いは、彼が完全に消える最後の瞬間まで、いつもの無表情を崩さなかった。彼がそう望んだからだ。

この時ばかりは、彼女の涙を見てしまえば、魔物になる自信があった。

「……ずっと、一緒に」

彼の悲しみを胸に抱くもの。それは永遠に。

だからきっと、彼の嘘も、連れ合いはすぐ気付いて黙っていたのだろう。

彼は実際には、＊＊＊を知っていたし、○○の気配も彼女に感じていた。ただ、この彼が誰であるのか、それがわからなかったのは本当だった。

彼が＊＊＊だと感じてしまえば、彼の魂は○○のものだ。十十のことも心配で、ここに留まることにきっとためらっていた。

けれど、彼が＊＊＊でないものに戻れば、飛竜の縁が薄まり、この地にいられなくなる。

だから誰でもなくさせた。それが彼の望み。

「……探し続ける希望の方が、オレは好き」

顔を上げたら、またも見知らぬ地獄にいた。

やれやれ、と、消えない赤い砂嵐に笑った。

エピローグ

アズ・Lという新たな名を、彼女は一方的に与えられた。名とは普通、「力」だけのものには、己の在り方を縛る強力な鎖だ。

水と風を司る極夜の竜が、彼女の古い姿。暗黒の風と呼ばれ、水の力も司る炎獄の天使が、彼女に目をつけたのは無理もなかった。

「運命の水門を開閉する女神。君にはそれが、ふさわしいだろうね」

そして勝手に身に宿された、水門の縁。

彼女はいつでも、与えられるものを呑み込む水の性だったから、彼——心眼の悪魔は放っておけなかった。彼女に宿る彼の眼が、その水門の縁を喰らう。

古くは彼が連れ歩いていた青白い者が、彼と彼女の間を疑ったように、彼は黄泉にある内に、彼女への情を持っていたと思う。

彼女もその心に気付き、あえて強く拒絶していた。かつて愛する者の依代だった悪魔に、彼女も惹かれる魂が無いとは言えなかったから。

——ヒトの気も知らずに。

彼女の胸に在る彼の眼は、青白い者が己の眼として、魔道の媒介にしたのが発端だった。彼でも青白い者でもある眼が、運命の水門の縁を、青い炎を呑み込む者に送る。

——これがオレって目印にもなるだろ。

運命がどう流れても、彼も彼女も、互いを探す。

たとえその往く先が、世界の果てでも。

黄昏千夜 -了-



As.L//Azur

Wish to see you again

-LINK-

▼▼最新作は X f o l i o で

電子書籍化前の実験作置き場 (<https://xfolio.jp/portfolio/sky>)

※ R 指定やネタバレ強め作品・文学フリマ関係 PDF などはパスワード公開・DL 制
パスワード入手はこちら (ラクマ) (<https://fril.jp/shop/xsky>)

例:『黄昏千夜』補完話

競奏 R15 程度 (<https://xfolio.jp/portfolio/sky/works/5339386>)

▼▼拙作投稿先全体像

総合過去作置き場・エブリスタ (<https://estar.jp/users/107742416>)

完結済正史置き場・ノベラボ (<https://www.novelabo.com/author/4396>)

主に天ルート置き場・星空文庫 (<https://slib.net/a/25945/>)

橋診療所シリーズなど夢ルート他・パブー (<https://puboo.jp/users/sky-lux>)

Many thanks for your visit.

X@kazari_sou Studio ***46

❖競奏 curtain-up

化け物であっても、男女が十年以上も近くで過ごせば、何がしかの情も起こる。たとえば相手が「力」だけの、心の無い女神であれど。

ましてこの黄泉、竜の墓場に所用で留まる悪魔は、眼帯で覆っても「力」を視れる眼を持っている。しかも女神は、彼の伴侶の「力」から創られたため、惹かれるなという方が難しい。

「貴女は本当に頑固だな、アザー」

心がここに無い女神は何も喋らない。彼を見ることすらなく、自身の肩を抱いて森の隅に蹲っている。その背には多くの亡靈の残滓、黒い翼がゆらりと広がっていく。

女神を苦しめる黒い翼を、彼は「心眼」でいつも断ち切る。そうしなければ女神の強い「力」が暴走して、かつては多大な災害が引き起こされた。

「貴女に本来、墓場を守る義理はないだろう。ここは貴女——魔竜となった者を閉じ込めらる檻。大人しくさえすれば、誰にも文句はない。何故貴女は、低きに流れる道を決して選ばない？」

「心眼」を持つ悪魔には、言葉を話せない女神であっても、心を直接受け取りはできる。いつもは悪魔を必ず無視する女神は、今日はかなり弱っていたらしい。そっと自身の胸に刻まれている、竜の「逆鱗」を触った。それが女神の悪魔への返答だ。

「……正しくないからか。相変わらずの答だ」

竜人の逆鱗には、その竜人を守り統制する意志が宿されている。しかし女神の正しさの逆鱗は、古くは彼の眼だった偽物なのに。

「なら貴女を外道に落せば、解放されるか？」

動けないほどに弱った女神を、片手で顔を上向かせる。

そのままの勢いで、唇を奪った。いつかの青白い、彼の体の使い手のように。

Full text(<https://xfolio.jp/portfolio/sky/works/5339386>) ※ R15

曉夜曲

著 者 pierrette***

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
